[De POLA]地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

No.2

"92年春夏号

春の糖平湖畔

●北海道・上士幌町

北海道のほぼ真ン中、大雪山国立公園の東大雪地域にあり、スキー場、温泉、湖、牧場など、雄大な自然がいっぱい。"熱気球のまち"としても有名だ。8年以内に家を建て居住することを条件に分譲された宅地は19区画。町の中心部に近い場所で6区画が残っている。

夏のイベント熱気球大会には全国から選手や見学者が訪れる。

日本最古の芝居小屋「康楽館」は大繁昌

特集 田舎で暮らしませんか！

「宅地分譲」などで話題を呼んだ町村・フォトガイド

（詳しくは本文5頁～20頁参照）

もくじ

特集／田舎で暮らしませんか！

「宅地・農家売ります」最新情報

①市町村による田舎不動産事業――5

本郷村・高知県の「カントリーライフ事業」・上士幌町・小坂町・森吉町・大江町・広瀬村・高柳町・真田町・村岡町・朝地町

②カントリーライフのための心得帳――13

③田舎暮らしのここが魅力

・雪の生活こそ魅力的――17

・「時間」を大切に自然体で――19

・東京にもあった過疎の村・檜原村――29

●自然・大地からの提案

「森の住人たち」といい関係を／宮崎学――22

●エッセイ

むらおこしは人づくりが決め手／森巌夫――28

●都市から農村へ

・「すこやかベジタ」をめざすダイエー・フーズライン本部――31

・ライスバーガーは日本の風土に合ったおいしさ（モスフードサービス）――33

●INFORMATION――35

ふるさと花まつり情報／参加しませんか スポーツ＆イベント／郷土芸能祭

『でぽら』（DePOLA）によせて

全国過疎地域活性化連盟

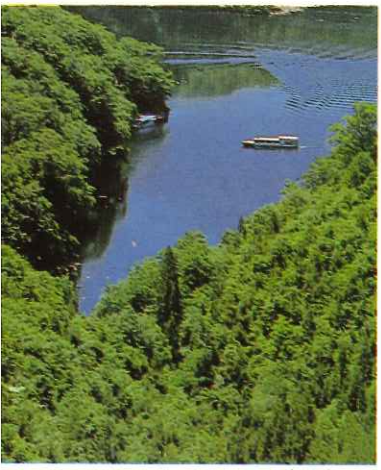
「でぽら」（DePOLA）とは、Depopulated Local Authorities（人口が少ない地域）、つまり過疎地域を意味します。

わが国には過疎市町村が1,165団体（34市、751町、380村）あり、全市町村の36.0％にも達しています。人口が減ると教育文化、福祉、産業経済などあらゆるものに影響し、地域の活力を失ってきます。

一方、東京をはじめとする都市は人口の過密化で、人々は狭い居住空間や騒音、交通ラッシュというさまざまな弊害の中で暮らしています。

貴重な自然環境と農産物の供給地である地方、日本の伝統や文化、風土を伝承してきた地方――そこは都会に住む人々にとってもかけがえのない"ふるさと"です。そのふるさとが元気いっぱいでないと都市に暮らす人も元気ではいられなくなります。

地方と都市、もっと理解し協力し合って、お互いに発展していく方法はないのでしょうか。そのための情報交換と交流誌が「でぽら」です。とくに、明日を担っていく若い人たちとのネットワークを期待しています。

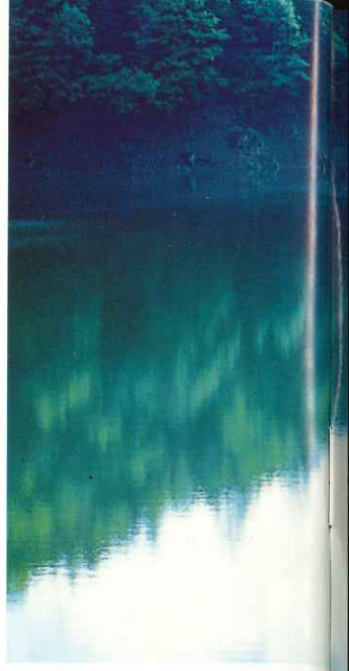


太平湖

活気ある商店街

●秋田県・森吉町

定住促進住宅地として10区画を分譲、町内と町外の人半々が決った。阿仁川ぞいに開けたところで活気ある商店街もあり、農林業も盛んなまち。「浜辺の歌音楽館」をはじめとする文化・観光施設も多く、スキーやキャンプなどにもおすすめの穴場。



サラブレット育成牧場

●新潟県"さんさい共和国"入広瀬村

新潟県の東端、福島県との県境に位置する入広瀬村は大自然の宝庫の中に息吹く越後の奥座敷。とはいってもJR只見線が走り（村内に3つ駅がある）、交通便は比較的よい。「さんさい共和国」を名乗り、山菜祭り、山菜ツアー、ふるさと便などを通じて都市の人々との交流も盛ん。宅地は6区画を分譲した。

(株)ホームタウン高柳による注文建売住宅の建築風景。右は完成した家。

●新潟県・高柳町〈ホームタウン高柳〉

黒姫山のふもとにある清流の里、高柳町では、役場、農協、町内建設会社による第三セクターで(株)ホームタウン高柳を設立。土地付注文建売り住宅を販売していく。昨年は6戸分譲（平均150坪）した。住宅建設費を入れて2000～3500万円が目安。申込み者が200件以上あり、今後もこの方式による事業を積極的にすすめていく方針。

●秋田県・小坂町

鉱山と十和田湖を有する小坂町では坪当たり1万円で6区画を分譲、人気を呼び200人の応募があった。十和田湖観光の一環として整備された芝居小屋(劇場)「康楽館」など魅力ある施設や自然景勝地も多く、また町に定住、就労する人には助成金も支給される。

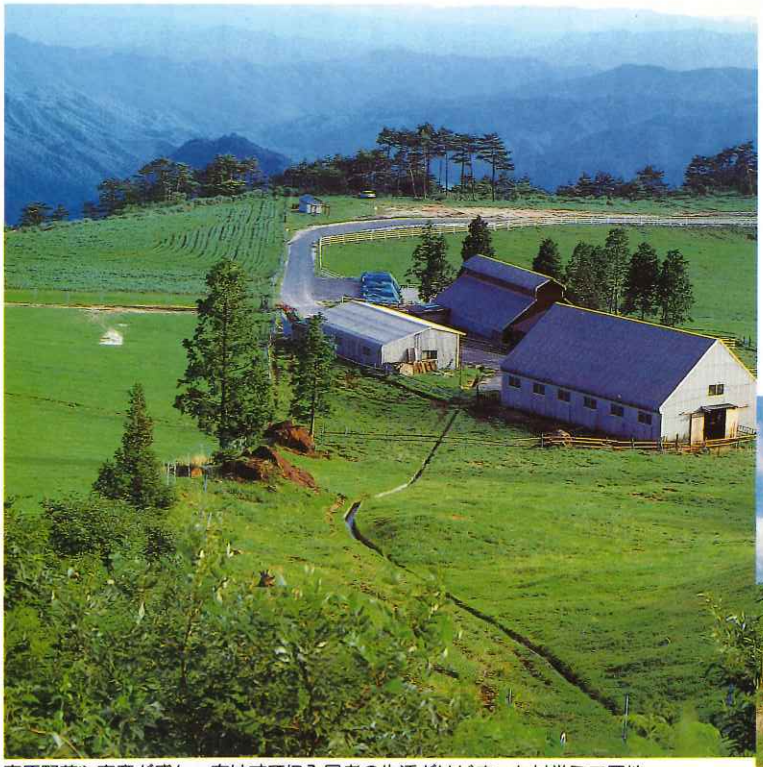
注文に応じて木造住宅を建築する若手の組合員たち。
右はログハウスの感覚を生かした住宅。周辺の自然環境も抜群。

古い民家を改装し、会員制による別荘、宿泊所として活用されている。

●福島県・只見町〈たもかく〉

町内の廃家、民家を補修して貸出したり地元産の木材や廃材などを活用して、ログハウス等の建築と内装を行う目的で発足した只見木材加工協同組合「たもかく」は、山林や宅地分譲、交流活動等にも力を入れ、ウッドライフを楽しむ人達の拠点的存在となっている。その影響を受け、周辺の伊南村、南郷村、金山町などにもログハウス村ができはじめ、週末に訪れる家族の姿が多くなっている。

只見町布沢に住む鈴木さんの家。仏像作りに月の半分以上をここで暮らし、「厳しい冬の生活」も満足。



高原野菜や畜産が盛ん。右はすでに入居者の生活がはじまった村営ミニ団地。

●山口県・本郷村

「一村5品運動」「さわやからかん高原山岳リゾート村」「ちびっ子動物共和国」、山村留学など村おこし施策と農林業の振興に熱心に取りくんでおり、自治体が行う宅地分譲にも、他町村に先きがけ6年前に着手した。村営農村定住団地(14区画)にはすでに9家族が入居している。20年間は坪当たり100円で貸りるが、20年定住すると無償で譲渡される。団地のある場所は学校や公民館にも近い。

特集

田舎で暮らしませんか！

「宅地・農家売ります」最新情報

❶ 市町村による田舎不動産事業

都会を離れて田舎暮らしがしたい、一戸建ての家に住み家庭菜園があれば最高、という都市生活者の「田舎暮らし」志向が年々高まっている折、過疎町村が過疎対策と町おこしの一環にしたいと宅地分譲や農家貸出し事業に乗り出した。

若い夫婦を対象に、永住、あるいは20年間定住するといった条件にもかかわらず、格安で、生活基盤も整備された信頼できる造成地ということで人気を呼び、どこも問い合わせが殺倒。二百倍、三百倍の応募があった町村もある。応募者は、同じ町内や近隣町村からの住民もあるが、都市圏住民からの応募が半数を越えている。

応募者の中から何回にもわたって入居希望者を選んでいき、最終選考に残った人は、町村が定めた期間までに家を建て住みつくことになる。

まだ移住者の数は少ないが、果してこの「田舎売ります！」企画は成功するだろうか。

「若い夫婦にきてもらって少しでも町や村に活力がでるようになれば」と期待する自治体と、都市生活者の田舎や一戸建てへの憧れがうまくドッキングできるか、行方をしっかり見守っていきたい。

昨年、「田舎売ります」「農家貸します」事業を行ったり、現在造成売出し中の町村を中心に、いくつかを紹介してみた。

公民館、小中学校のすぐそばの一等地にすでに9家族が入居——山口県 本郷村

本郷村の中心街

自治体が宅地分譲を行いはじめたのはここ二、三年だが、そのトップを切ったのが、昭和61年に「20年間定住すれば、ただで村有地を差し上げます」との呼びかけで話題を呼んだ山口県本郷村。

村営農村定住ミニ団地を造成し、村が入居者に安く貸付けるという方法をとり、20年間定住した人はその土地を無償でもらえるというもの。

14区画を造成、すでに9家族、32人が入居している。残りの5区画も契約済みで、家屋の建設が行われている。

入村した人は、大阪二世帯の他、愛知、広島、兵庫、静岡、長崎から各一世帯。

貸付け料は坪当り一カ月100円。一戸当たり1万1000円から1万5000円といったところだ。場所は、本郷村役場のすぐそばの小高い丘の上で、近くに公民館や小中学校、商店もある便利なところ。

入居者からの評判もよく、現在も県内外から入居希望の問い合わせが多い。そのため町ではさらに団地を確保し、この定住化事業を促進していく計画だ。

本郷村は中国山脈の谷間にある人口約1000人の村。農林業の振興と村おこし施策として「一村五品運動」、「さわやかからかん高原山岳リゾート村」、動物とのふれあいの場「ちびっ子動物共和国」、山村留学などを積極的にすすめており、62年に行財政優良市町村として自治大臣賞を受賞している。

●問／山口県玖珂郡本郷村役場総務課
☎0827（75）2311

県が窓口になって——国民休暇県・高知の『カントリーライフガイド事業』

「空き家貸します！」と県内の空き家を貸し出したり安く売る事業に最も早い時期から取りくんでいるのが高知県。

過疎化と人口の高齢化がすすむ高知県では「国民休暇県・高知」を宣言し、「地域の良さを見直し、緑あふれる美しい県土をつくり、笑顔とユーモア、土佐の心を提供していく」ことをめざし、カントリーライフガイド事業を昭和63年よりスタートさせた。

県の計画推進課が窓口になり、各市町村から寄せられた空き家や農用地などの貸出し物件を年一、二回『こうち田舎案内』というパンフレットにまとめて都市へ配布してきた。

現在まで紹介した空き家の件数は87件、問い合わせは3000件以上にのぼっている。

現在までに47世帯、67名が移り住んできた。ほとんどが関東と関西の大都

高知県の紹介により貸出し、または売出した空農家の一例

市圏からの転入者で、中には北海道からやってきた人もいる。

売買か貸借か、価格をどうするかについては家屋や土地の所有者と町村にまかされている。町村の場合、カントリーライフガイド事業に熱心なところとそうでないところがあるため、物件には片寄りはあるが、事業が定着してきたため、協力する町村が増えている。

物件をみると、地理的には内陸部の山間村が多い。そのため海辺や四万十川沿いなどを想像してきた人には合致しないこともある。

空き家は、築百年以上の本格的な木造家屋で、蔵、納屋、車庫付きで家の間取りも10室以上あるものから、80㎡程度の小さな家までさまざま。建物の程度は Ⓐ ABCの4段階に区分し、Ⓐはすぐ入居OK、Aは襖の張り替え程度でOK、Bは建物の改修は必要ないが設備（風呂、釜）の改修が必要、というふうに分類している。大抵の空き家がBに属している。

パンフレットでみる限り、最初の一、二年間に紹介されていたような都会人好みの本格的な木造家屋、格調ある屋敷といった雰囲気の物件は減ってきている。

都市から移住してきた人の生活ぶりをみると、民宿を開いたり、大工の資格をとって建設業に従事する人など、それぞれ工夫と努力の様子が伺えるが、移住してきたことについては「よかった」という意見が大半である。

県では、農業を志す人や働き口を求める人のために、全国農業会議、高知県農業会議主催で「就業ガイドセンター」を設けて、相談や指導にあたっている。

まず自分で農村生活を体験してみること。また、安い価格といっても修理などに経費がかかるため、ある程度しっかりした資金計画をたてることが必要です、と担当の杉村さんは語っている。

●問／高知県国民休暇県局計画推進課
高知市丸の内1－2－20☎0888（23）1111内2262～5

熱気球のまち・上士幌町（北海道）では若草中央団地19区画を分譲中

北海道の町村による宅地分譲では、〝熱気球の町〟をはじめ糠平温泉スキー場などで都市の若者にも人気を呼んでいる上士幌町が、昨年住宅団地を造成、「若草中央団地」として19区画を売り出した。

昭和63年に廃止となった士幌線の線路脇きに広がる3000坪の団地。

場所は役場にも近い市街地の一角で、一区画400㎡（約120坪）前後で、価格は250万円から277万円（434㎡）と格安だ。

自ら居住する住宅、あるいは会社などが従業員のために住宅として建築する人を対象に、契約時から8年以内に家を建て居住することが条件になっている。

売出しと共に13区画は即売となり、現在、内定、検討中を含めて6区画が残っている。

上士幌町は、北海道の真ン中にでんと腰をすえる大雪山国立公園の東大雪地区にあたり、十勝川源流部原生自然環境保全地域に指定されているところ。ナキウサギ、クマゲラ、シマフクロウなどの貴重な動物や植物、鉱物があり、これらは「ひがし大雪博物館」で展示されている。糠平温泉をはじめ、ホロカ温泉、山田温泉などの保養地と全長4・3キロに及ぶ林間コースのスキー場などで、北海道ならではの雄大な自然郷として人気上昇中。農業は酪農の盛んな町で、ナイタイ高原牧場には3000頭の牛が放牧されている。

町では、町の自然やスキー場等にほれ込んでこの町に定住してくれる若い夫婦を望んでおり、今後希望者が多い場合は、さらに宅地造成も検討していく計画だ。酪農、農業をはじめる人にも仕事はいろいろあり収入面の心配はなさそう。

●問／北海道河東郡上士幌町土地開発公社（役場内）☎01564（2）2111内162

東北に熱い視線

東北地方では、森吉町、小坂町、合川町、琴丘町（秋田県）、大江町、西川町（山形県）などが宅地造成をし、分譲した。Uターンの若者への助成金支給や住宅建築費の補助など、きめ細かい政策を積極的にすすめている。また、岩手県川崎村では平成5年をメドにいま検討中である。

宅地分譲にUターン、Iターン作戦など
小坂町（秋田県）の定住支援

鉱山と十和田湖を有する「鉱山と湖の町」として栄えてきた小坂町では、不振の鉱山を逆に観光や町の活性化に生かそうと、日本最古の芝居小屋「康楽館」や、三百万トンの鉱石を採掘した「露天掘跡地」をオープンし、十和田観光ルートの一部として人気を集めている。

人口流出防止と若者の定住を促進するための施策も、他市町村に先がけて行われている。

宅地分譲では、小坂川沿いの景勝地1783㎡を造成、6区画を坪当り1万円で売出した。1区画71万5300円から109万8000円という安さで人気を呼び、200人の応募があった。分譲条件は、夫婦の年齢の合算が75歳以下、5年以内に住宅を建築すること。すでに1世帯が入居、新しい町会もできて順調なすべり出しだ。

また、小坂町では鉱山の町として新たな工業団地を造成、6企業に600人が働いているが、若者に町内に就職したり、町内に住居を構えてもらうよう〝定住〟のための助成金制度を設けている。

新卒者の場合、町内事業所に就職する人に20万円、町外には10万円、Uターンして町内に就職する配偶者を有する人には30万円、Iターン（町外に在住していた人が町に転入してきて就職した場合）、Kターン（町外者が町内に転入した場合）など、町の外からきた人の場合も同様の助成金が出る。

●問／秋田県鹿角郡小坂町役場商工観光課・土木課☎0186（29）2211

半分は町外者が転入
森吉町（秋田県）の町おこし作戦

「浜辺の歌」「かなりや」などを作曲した成田為三の出身地として「浜辺の歌音楽館」を開設、〝森と湖とメロディーのまち〟として売り出している森吉町では、定住促進住宅地の分譲、貸付地を平成3年10月に完成した。

完成よりひと足早く8月5日までに募集を行ったところ、10区画に対して申込みは22名あった。現在入居者の最終選考を行っているところだが、町内に住み新たな住宅地として求める人5名、町外者5名に決定、3～5年以内

阿仁川沿いに市街地を形成する森吉町

陣場岱地区造成地

131区画の大規模団地、たちまち完売——大江町（山形県）

に住んでもらうことになっている。町外者では東京から移住してくる人も数名予定されている。

市街地は阿仁川沿いに開け、分譲地も県道に面した市街地の一角にある。フラワーゾーンを設けるなど緑地公園内の住宅地として造成する予定で、除雪や生活排水対策も整備中。

森吉山県立自然公園を有し、スキー場、国民宿舎、太平湖畔のキャンプ場など、自然を生かした施設もいろいろあり、ブナの原生林とそこに棲む野生動物など、数多くの貴重な自然が残されているまちである。

●問／秋田県北秋田郡森吉町役場町おこし対策室☎0186（72）3111

同じ東北でも、山形県大江町になると、首都圏からの交通（JR左沢線）も一段と便利になり、過疎地というイメージは全くない。

大江町では第一期、二期に分けて131区画という本格的な大規模宅地を分譲、マスコミ等にも取り上げられて話題を呼んだ。

上水道、排水浄化槽、ガス、電気等の生活基盤設備も完備し、予約申込み（平成3年10月末）から6年以内に住宅を建設し定住することが義務づけられている。

一区画の面積は、宅地内に菜園も可能なゆとりをと、最低100坪以上から最高190坪まであり、平均すると120坪前後。

価格は坪当たり5万円以下で、500～600万円台が最も多い。団地の入口には中央公民館、保健センター、歴史民俗資料館などがあり、町の中心地としての役割を担う場所でもある。

大江町では、昭和35年の合併時に1万5819人だった人口が平成元年に1万725人に減少。そのため町内地場産業（ニット産業）の振興、交通ネットワークの整備、企業誘致の拡大（町内9企業268人）を行う他、住宅団地の造成なども早くから手がけてきた。

住宅団地はすでに昭和47年から62年までに町内に5住宅団地、7万6000㎡、155区画がつくられている。

とくに55年以降に分譲した月が丘住宅団地（54区画）、62年分譲の柏陵団地（49区画）の場合には、町内者の住替が3分の2で、残る3分の1は都市圏、隣接市町からの転入者が購入している。

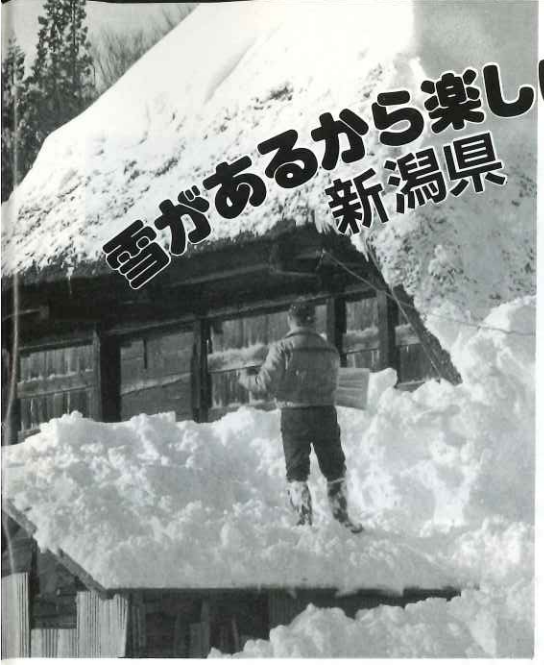
これらの実績から、昭和60年以降は人口も3％以内の減少にとどまり、町ではさらに21世紀までに11300人（5・4％増）をめざして、今回の大規模分譲を行った。

昨年10月に受付けを開始したところ、〆切日前に300件の申込み・問い合わせがあり、12月7日に抽選会を行い、当選者を決定した。

それによると、町内者36戸、県内24戸、県外21戸（東京4、その他17）。申込み

大江パークタウン完成予想図

雪があるから楽しい 新潟県



件数でみると県内26、県外55件で、県内では寒河江市、山形市からの申込み者が多く、県外では東京、神奈川、千葉県在住者の問い合わせが多かった。

当選者の年齢別状況をみると、20代10人、30代25人、40代19人、50代20人、60代7人になっている。また家族数は4人家族が最も多く26人、つづいて3人家族21人、5人家族13人、独身は5件で、6人以上が7人もいる。

就労地である山形、天童、東根市等へのマイカー通勤も30～40分で可能、また県立高校や大学などへも通学可能という交通の便のよさが人気を呼ぶ一因にもなっている。首都圏からは山形新幹線の開通に加えて、県内初の山形自動車道の開通や国道287号バイパスの整備がすすんでいることも見逃せない。

また、とくに30代の夫婦者でないとダメといったような条件をつけていないことから、老人をかかえる世帯の申込みなどが目立ち、それが画一的でないいろいろの人が住む新しい町としての可能性を生んだ。

産業の中心は、さくらんぼ、りんご、洋梨ラ・フランス、ぶどうなどの果物の産地で、町では「最上川とフルーツのまち」をキャッチフレーズにしている。蔵王、月山、山寺等の観光地の入口にもあたる。

●問／山形県西村山郡大江町役場建設課
☎0237（62）2111

雪国越後には、街なみや家の造りにも豪雪を考慮したきめ細かい配慮があって、都市生活者からみると新鮮で感動を与える。雪を利用したスポーツや雪の日々の中での行事も盛んで、雪国ならではの暖かいおつき合いがある。新潟県では話題の二ヵ所を取材した。

見晴しのよい場所に6戸 「さんさい共和国」入広瀬村

日本一の豪雪地と自称する入広瀬村は、福島県奥只見町を県境に持つ山の村。「さんさい共和国政府」という看板が村の入口に立ち、入っていくとよく手入れされたブナ、ナラ等の林が続く。静寂な冬木立ちもいいが、新緑、青葉の頃は素晴しいだろう。6月には〝さんさい共和国建国祭〟として「ふるさと山菜ツアー」が開催され、都会などから400名の入村者がやってくる。秋はコシヒカリときのこごつつおのまんぷくツアーなど、ユニークな企画で頑張っているまちだ。

入広瀬を定住の地にと、村外在住者を対象にして造成した団地は、役場から上の方にのぼった見晴しのよい高台6区画。1区画400～500㎡で上下水道、排水路が整備され、もちろん冬も除雪するので通勤・通学が可能な場所。JR只見線入広瀬駅までは1.5キロの距離である。

「ふるさと入広瀬の会」の会員などを中心にPRしたところ、反響は大きく、300件の問い合わせがあり首都圏だけで100件以上あった。

最終入村者も決まり、3年以内に住宅を建築し定住してもらうことになっている。

入広瀬村の宅地の場合は、定住契約の際に1㎡当たり500円の契約保証金を納付するが、定住をはじめた時点でその費用は返還されるので、分譲地としてはタダということになる。

引き続き問い合わせなどが多いため、町では来年以降も宅地を造成し提供していく予定である。

なお「ふるさと入広瀬の会」は、入広瀬を第二のふるさとにして、味覚と特産品、観光施設と人情のふれあいを提供するもので、ふるさと産直品企画

分譲地(下)とそこからの眺め

この会員たちの中から第二のふるさとを第一のふるさとにする人が育つか、関心をもって見守りたい。

●問／新潟県北魚沼郡入広瀬村役場ふるさと入広瀬の会☎025799(6)2311

の走りともなった。「さんさい共和国」独立宣言は昭和58年に行われ、会員たちは山菜ツアーの他に、雪おろしツアーや真冬の大遊雪祭にもやってくる。

土地付注文建売り住宅を格安で 三セクによる里づくり——高柳町

黒姫山のふもとにある清流の里、高柳町は十日町と柏崎市の中間点に位置する、やはり豪雪の地帯。しかし年々豪雪が減っている一方で克雪対策も万全を期しているので、町に定住して通勤する人が増えている。

高柳町では、町と農協、それに町内の建設会社7社による第三セクター、株式会社ホームタウン高柳を設立、土地付注文建売住宅を分譲している。

今回分譲した6戸は、周辺を山林に囲まれた市街地の一角で、平均150坪(約500㎡)。住宅は各戸が個性的なタイプで、洋館風木造住宅、ロッジ風住宅、数寄屋造りの民家などが予定

され、さらに注文者の希望を入れて建築される。

定住者の受入れと共に、町内の建設会社の活性化をはかり、併せて新しい街なみづくりの一環にしたいという考え方。

価格は土地付で約2000万円から3500万円程度と見込まれている。

問い合わせを入れて申込み者が200件以上に達したため、今後もこの方式による事業を積極的にすすめていく考えだ。

また、町では数年前から空き家の貸し出しや売りも紹介してきたが、こちらも希望者は多いが、いまは物件がなくなっているのが現状だ。

●問／新潟県刈羽郡高柳町(株)ホームタウン高柳☎0257(41)3355

9割が町外から 真田町・出早団地(長野県)の場合

新潟県から長野県へ目を転じると、長野県の場合は町が行う造成、分譲の他に、民間や個人による田舎不動産事業が盛んで、殆どの町村に一、二家族は、都市からの転入者がいるといわれている。

昨年とくに注目を集めたのは、駒ヶ根市が菜園付宅地を区画分譲したこと。同市は人口は確実に増えつづけている伊那地方の中核都市だが、町内企業の就労者や町外からの希望者に応えるかたちで、市が事業主になって分譲した。

北信地方では、小県郡真田町が土地開発公社をつくり、出早団地51区画を完成して分譲した。土地高騰の上田市などから申し込みが多く、競争率は4倍以上に達した。

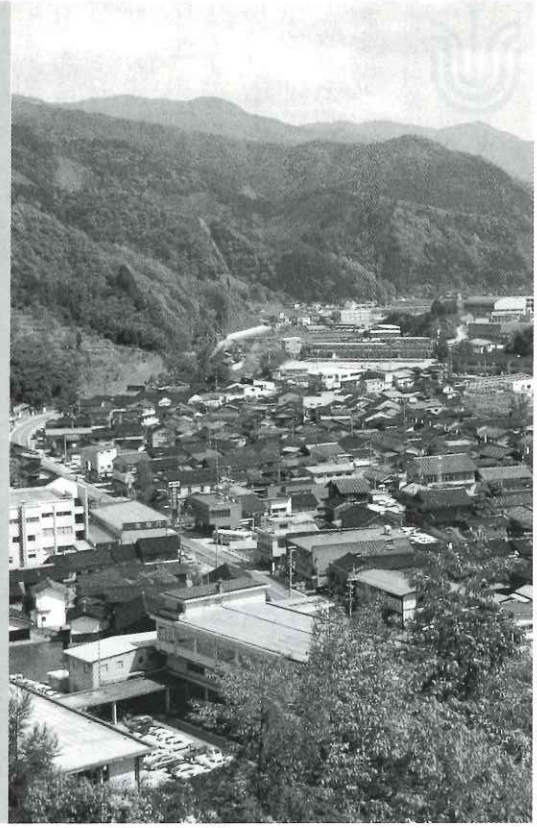
Uターン、Iターン希望者用区画も即売となった。(価格は坪10万円から14万円が中心)。

今後第二、第三期工事を行い、将来は130戸以上の、町最大の団地になる予定だ。

真田町の人口は1万1200人で、昭和33年の町村合併時から2000人余減少している。この宅地分譲を契機に田園住宅都市として発展させていく考えで、出早団地のあとは別地区に50区画を造成するプランもある。

その他、長野県では伊那地区南アルプス山麓の上村、中川町などが宅地分譲をしている。

都市住民や若者に人気
宅地を完売した 兵庫県 村岡町



村岡町の中心部

関西・中国地区では、広島県の油木町、兵庫県の養父町、大屋町、村岡町がすでに宅地分譲をし、島根県弥栄村が今年、一定期間住むことを条件に無償分譲することを計画中だ。

〈問／島根県那賀郡弥栄村役場☎0855(48)2111〉。

兵庫県村岡町がこのほど実施した宅地分譲をみてみると、造成地は町中心部から2㎞以内にある便利な場所で、19区画。道路、排水路、電気、電話等の施設も整備し、一区画230～460㎡、価格は533万円から約739万円で分譲した。最終33名の応募があり、重複した区画は抽選で入居者を決めた。阪神方面からの応募者も多く、町では今後も過疎対策の一環として、Uターンなど、若者向けの宅地を整備していく計画である。

村岡町は、日本海寄りの気候の温暖な山村で歴史の古いまち。自然環境はバツグンで、平成6年には、天皇皇后両陛下をお迎えして第45回全国植樹祭が開催されることになっている。

●問／兵庫県美方郡村岡町役場企画調整課☎07969(4)0321

やすらぎと芸術の里づくりの一環として
坪100円の貸付けで 大分県 朝地町

朝地町のPR用ポスター

九州では、大分県朝地町が「やすらぎ住宅団地」（23戸）を計画している。

朝地町は大分県の南西部にあり、大分市から車で約1時間、豊肥線も通っている町。「東洋のロダン」といわれ近代日本彫塑の基礎を築いた朝倉文夫の郷里で、「愛の園生・朝倉文夫記念公園」があり、町では〝やすらぎと芸術の里〟づくり事業に力を入れている。

住宅団地の造成事業もその一環で、100坪から150坪の宅地造成と飲料水の確保を町が行い、宅地は町に永住を希望する人に月額1坪100円で貸出す。20年間居住すれば、土地は居住者に無料で贈与されるというもの。

土地の広さは150坪（495㎡）を基準としており、飲料水は貯水タンクまでは町が設置、住居までの配管等は個人負担。①住民票を朝地町に移す②借り受け後6カ月以内に住宅建設に着手する③住宅建設には町の業者を利用する④年間100万円以上の所得がある⑤町づくりに協力できる人――が条件になっているが、とくに年齢や家族構成についての条件は設けていない。

平成4年3月までに造成地が完成、4月から正規募集を行うことになっており、町では「心にゆとりを持ち、自然のなかでのびのびとした生活を望んでいる人に理想のまち」と語っている。「朝地牛」「神角寺みそ」「朝地漬」など、農業を生かした特産品も多い。

●問／朝地町役場総務課企画係☎0974(72)1111㊥2-1、2-5

今回紹介した町村以外にも宅地分譲を計画中の町村は次の通りです。

●山口県美東町　交通便のよい山林を造成、47区画を今年7月までに3回に分けて分譲する。1坪平均3万5000円で。問☎08396(2)0242美東町役場企画課

●鹿児島県入来町　温泉付宅地1区画200～300㎡を約60区画分譲する。坪約10万円で。問☎0996(44)3111入来町役場開発課

② カントリーライフのための心得帳

報告／山本一典（ライター）

田舎ブームは本当か

最近、田舎暮らしに関する記事が新聞や雑誌などのマスコミで盛んに特集されるようになり、ちょっとした田舎ブームの様相を呈している。しかし、その中身をよく検証してみると、媒体によって田舎暮らしのとらえ方にかなり相違があることに気づく。ある新聞は地方行政の分譲地販売に焦点を絞り、ある雑誌はセカンドハウスによる週末住宅を取り上げ、またある専門誌は新規就農者の募集記事を掲載するなど、取材対象にかなりバラつきがあるのだ。なかにはアウトドアやリゾートと田舎暮らしを混同した例まであり、一部マスコミの報道で誤解を招いている点が少なくない。もっとも、見出しに〝田舎〟とつく記事に反響が大きいのは事実で、これがマスコミの田舎ブームを助長させる原因となっている。

しかし、結論を先にいえば、七年前からこの分野の取材を続けてきた私からみて、マスコミが煽りたてるような田舎ブームなど存在しない。むしろ静かにジワジワと浸透している分野であり、その暮らしの形態が多様化してきたに過ぎないのである。まず田舎暮らしの本当の意味を知るためにも、少し歴史的経過に触れておきたい。

「田舎に移り住む」ことの時代的背景

都会の人間が田舎に移り住んで新しい共同体をつくる動きはかなり以前からあったのだが、これが顕著に現れてきたのが昭和40年代後半から50年代にかけての時期である。当時の日本は高度成長から一転してオイルショックを迎えた激動期にあたるわけだが、おもに学生運動を経験した若者が時代の波と逆らうように農村へ入り、新しい共同体をつくりながら自然食などの生産に取り組み始めた。その跡を追うように、今度は木工や陶芸などの創作活動を行う芸術家たちが、徐々に活動の場を田舎に移していく。農村では産業構造の変化で若者の流出が目立った時期であり、使用していない農家の空家を夕ダ同然で貸してくれるところも少なくなかった。

その動きが一般の都会人に波及するようになったのは、いまから10年ほど前のことである。おもに長野県の過疎村で空家対策を行うようになり、葦葺き屋根の農家が都会人の憧れの的になった。

ただし、この時期は農家の貸家が主流であって田舎に移り住んで本格的に農業を始めたり、自給自足生活を試みる都会人が多かった。こうした田舎暮らしの流れを一挙に変える原因となったのが、昭和63年の地価高騰だ。都会でマイホームを持てなくなったサラリーマンが田舎の安い土地に注目するようになり、取り引きされる物件の主流も賃貸から売買へ、家から土地へと完全に移行していった。折りしもバブル経済の影響でリゾートブームが発生し、投機や遊びを目的に田舎物件に目をつける人が増えたのもこの時期である。

もっとも、バブル崩壊後は真面目に田舎暮らしを考える都会人が多くなったが、完全移住となると仕事の問題などですぐに決断できない。そこで、将来の永住を考えてとりあえず週末利用の住居を田舎に求めたり、都会に賃貸住宅、田舎にマイホームを設けて働く夫だけが休日に家族のもとへ通ったり、職種によっては田舎に定住しながら必要なときだけ都会へ出るといった新しいライフスタイルが出現してきた。

こうした住み分けを前提にした生活様式を業界用語でマルチハビテーションと呼ぶが、近年は田舎暮らしの分野でこの比重が高まりつつある。

要は、自らの暮らしを見つめ直す場として田舎が注目されているわけだが、これを投機や遊びと混同されてはたまらない。

実際、田舎に土地を求めたり、生活拠点をつくるのはそう容易なことではなく、温泉や海外旅行のようにブームになどなり得ないのである。暮らしを追求する者のみがこの分野に身を乗り出せるのであり、田舎の土地は安い、と安易に記事を組むマスコミの情報に踊らされてはいけない。

農家が土地を手放さない理由とは――

ひと口に〝田舎〟といっても、その範囲は実に広い。地方都市の郊外から平野部の農村、渓流周辺に集落を形成する山村まで含まれる。

とくに地域を限定するわけではないが、この分野の仕事を専門にしている私たちが〝田舎〟と呼ぶのは、おもに都市計画区域内に含まれない山村を指す。というのも後継者不足による過疎化と高齢化が一段と進んでいるのがその地域であり、今後農業の大規模合理化が促進されても、一番恩恵を受けない領域と考えられるからだ。

自然や土地不足に悩む都会人と田舎を結ぶ接点がそこにある。ただし、いくら山村の過疎化が進んでいるとはいえ、田舎暮らしの直接的な手段となる不動産の取得が簡単にできると考えるのは大きな間違いである。

都会で不動産を探そうと思えば新聞のチラシや専門誌などいくらでも情報はあるし、リゾート物件についても同様のことがいえる。しかし、この常識は田舎不動産については当てはまらない。田舎の家や土地を所有しているのは地元の農家であり、彼らは土地が売りものになるという概念を持っていないからだ。農家にとって土地や家屋は何百年と受け継がれた家の財産であり、収穫物によって家計を支えてきた生活の基盤にほかならない。いくら農林業が不振の今日でも、土地に対する執着はそう簡単に消えるものではない。しかも、農村内で取り引きされている不動産の価格は私たちの想像以上に安いものであり、これを都会人に高く売れば村の土地相場を崩すことになり、耕地を広げたり村の共同事業を始めるうえで障害になる。農村の人間と接する際は、良くも悪くも彼らが共同体意識に根ざした考え方を持っていることを、まず都会の人間は理解しなければならない。

しかし、一方でこれだけ山村を取りまく社会的および経済的環境が悪化してくると、条件さえ合えば土地を手放してもいいと考える農家が増えているのも事実である。

この場合の条件とは価格的意味よりも、むしろ買い手がその地域で本当にやっていけるかどうかが問題となる。山村では離農した農家が里へ下りる現象も目立っているが、先祖代々の墓が残っているうちはその地域に対して責任を持っているわけで、新住民がトラブルなどを起こすと結局は売り手が責められることになる。そうした配慮から、農家が土地を手放す際は慎重にならざるを得ないのだ。

逆にいえば、田舎暮らしを始める人はある程度はその慣習を守る人でなければやっていけない。田舎では道普請や葬祭の手伝いといった共同作業が不可欠であり、都会のように自分さえよければいいという生活態度は許されない。セカンドハウスを建てて週末利用する場合でも、ある程度は地元の共同作業に参加する姿勢が問われる。こうした田舎の人間関係を煩わしいと感じる人は、多少値段が高くても最初から別荘分譲地などのリゾート物件を探したほうがいい。田舎物件の価格が安いのは、それなりに理由があることを頭に入れておくべきである。

田舎で人脈を広げていくことが大切

ここまで説明してもまだ田舎不動産取得の難しさがわからない人は、おそらく土地は不動産業者を訪ねればすぐ買えるという先入観を持っている人だろう。確かに地方によってはこの種の不動産を扱う業者がいないわけではないが、そのルートは極めて限られている。

私はこの分野の唯一の専門誌である「田舎暮らしの本」（ＪＩＣＣ出版局）の物件欄も担当しているライターだが、地元相場に近い物件の情報を提供する業者は十指に満たないのが現状である。

というのも、短期譲渡課税の強化によってリスクの少ない仲介業務が主流となっている現在の不動産業界において、農家物件の仲介はあまりに商売になりにくい仕事なのだ。

具体的な数字で説明すると、近年の田舎物件の価格は１５００万円前後が標準であり、３０００万円を超えるものはなかなか買い手がつきにくい。業者の法定手数料は４００万円以上の物件で売買価格の３％プラス６万円を売買主双方からもらえるので、１５００万円の物件でも収入は１０２万円にしかならない。

ひと口に仲介業務といっても境界線の確認や現地案内の世話などがあり、それならば行動半径が狭くて価格の高い街なかの物件を扱っていたほうが無難なのである。

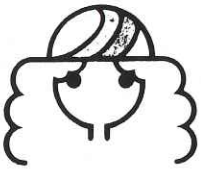
それでなくとも、過疎の山村にはもともと不動産業者など存在しないところが多い。では、田舎暮らしを始めるには何を手がかりにしたらいいのだろうか。

過疎村の実情を知ろうと思えば、とりあえず役場が窓口になる。ただ、具体的に空家や売地の情報を手に入れるのは、かなり難しいと考えておいたほうがいい。

なぜならば、公有地を分譲する場合はともかく、行政が各農家の私有権に立ち入ることはかなり勇気と行動力を必要とするからである。しかし、役場の情報から何らかのキッカケを見出すことはできる。じつは、それこそが一番大切なプロセスになる。

良質の田舎物件を手に入れるには、一にも二にも田舎で人脈を広げていくこと、それ以外にない。例えば、役場で村おこし活動の情報を得て、それに参加させてもらう。本当にこちらが真面目に田舎暮らしをしたいという気持が伝われば、協力者が現われるかもしれない。かなり手間のかかる話だが、そのプロセスを抜きにして田舎で人脈をつくることは不可能である。また、マスコミの情報もひとつの手がかりになる。これは私自身が取材のために実践しているやり方だが、ある特定の地方紙に3ヵ月分くらい目を通すと、具体的な情報はなくとも必ず何かヒントが隠されている。その地域が何を求めているか、それに対して自分に何ができるか、その視点でマスコミの一次情報からアプローチしていくわけだ。もっとも、そういう手間を除いてくれる中央の物件ルートやメディアがないわけではないが、物件探しの基本はあくまで自らの足で人脈をつくることにあると考えてほしい。

売地は電気、水、進入路に注意して



次に、不動産のタイプ別に取得する方法について触れておきたい。まずは売地から。

近年、各地で行政による分譲地販売が盛んになりつつある。とくに北海道と秋田の情報が多く、売り主が行政なら安心との判断から人気が高まっている。もともとは地元の若者定住促進を目的にしたものがほとんどだが、住民票を移せば都会人も受け入れてくれるところが少なくない。ただし、募集期間はある程度限定されるため、取得のタイミングが問題となる。また、地域によっては年齢制限を設けたり、建築期間が限定されているので、とにかく取得の条件をよく聞くことだ。行政の分譲地は一般的に造成に費用をかける傾向があるため、坪単価はやや高めだが、建築ローンなどは組みやすい。一例をあげれば、北海道南富良野町では約110坪の敷地に28坪の家を建てた物件が月々4万円台、ボーナス時19万円台からの返済で手に入る。

セカンドハウス用地を求める場合はどうしても民間からの情報が有力になるが、福島県都路村のように村おこし活動の一環として民間会社が土地を提供しているところもある。ここでは電気、水、進入路を確保したセカンドハウス用地を坪一万円前後で売り出しているため有名になった。まだこの種の情報はそれほど多くないが、都会人の需要が増えれば分譲地開発が盛んになっていくかもしれない。ただし、大規模別荘地のように都会の生活をそのまま持ち込もうとする人には抵抗感が強いので、地元の人間と接する際はそれなりの心がまえが必要である。

田舎で本当に広くて安い土地を手に入れたいと望むなら、基本的には農家から土地を分けてもらうことになる。この場合の取り引き単位は一反歩(300坪)、一町歩(3千坪)になることが多く、反単価もせいぜい150万円以下である。電気、水、道路が確保されているものは少ないので、造成費や工事費を見込んだ資金計画を練る必要がある。最悪の場合はいくらボーリングをしても水が出ないような場所もあるので、安いからと安易に手を出すことは危険だ。地元の人によく話を聞いて、しっかりとした利用計画を立てるべきだろう。

売家は補修費も資金計画に

田舎の売家には大まかに農家物件と中古住宅の二タイプがある。農家の売家は太い大黒柱や梁を使った立派な建物が多く、とくに茅葺き屋根の家は都会人に人気がある。しかし、農家物件は数に限りがあり、現状では売地に比べて取得しにくい。どうしても農家物件にこだわりたい人は、山形や福島などの豪雪地帯をねらうべきだ。建物がしっかりした構造で、耐雪性を考慮した家である。

農家物件を取得する際に一番気をつけなければいけないのは、補修費の問題である。いままでそこに人が住んでいたとしても、水回り程度は傷みが発生している可能性が高い。廃家同然の建物なら1千万円以上の補修費がかかるケースもあるが、最低でも100万円は必要と考えておいたほうが無難だろう。もし不安があれば、地元の工務店に補修費の概算を出してもらうといい。

田舎の売家には築10年程度の比較的新しいものも含まれており、私は便宜上、中古住宅と呼んで区

③ 田舎暮らしのここが魅力

雪の生活こそ魅力的

ログハウス・ブームの火付け役『たもかく』（只見木材加工協同組合）と入村者達

●地元の木材を生かして都市とネットワークを

土地の「一坪プレゼント」や「別荘地を坪一万円で売ります」などで話題を呼び、庶民のリゾートへの夢や田舎暮らし志向、ログハウス・ブームの火付け役を果してきた福島県只見町の「たもかく」。

「たもかく」とは、只見木材加工協同組合の略称。昭和54年に町の製材業者がつくった協同組合で、地元の木材を使って手づくりの家具や建材を提供しようとスタートした。そのための情報誌『たもかく』の制作を担った吉津耕一さんらのユニークなアイデアと「田舎暮らしこそ21世紀の新事業になる」という発想がマスコミにも注目をあつめた。

「廃屋になった農家をセカンドハウスに」と雑誌に紹介したのがはじまりで、以来、山林や宅地、ログハウスの分譲など、田舎不動産の物件を提供しつづけてきている。しかも単に不動産物件の提供ではなく、各種のイベントや都市と田舎との交流会、只見町を都会へ向けて紹介するPR活動なども積極的に行い、町おこし活動の拠点にもなっている。

「たもかく」の発行人であり、〝田舎暮らしのすすめ〟の仕掛人、吉津耕一さんと、只見町でカントリーライフを楽しむ住民を訪ねた。

●毎年10棟の家と50件の土地を

11月の最終日曜日。暖冬のせいか首都圏ではまだ紅葉した樹々が葉をつけて晩秋の風情をとどめていたが、塩原温泉をすぎ福島県南郷村に入る頃になると、樹々はすっかり葉を落とし、冬の気配が色濃くなる。

葉を落した落葉樹は、木の年齢や来年芽吹くための小枝とつぼみの用意の様子がわかり、葉をつけている時以上に魅力的だ。

只見町へ向う途中の伊南村、南郷村の山中にも、いま人気のログハウスが点在し、四駆に乗ってやってきた若者や中年親子の姿がちらほら。只見町の針生地区には地区名とウッドランドをもじって「ハリウッド」と呼ばれるログハウス村がある。週末には大抵どの家にもあかりがつき、雪の季節にはスキー場へくる人でさらに賑うとか。

只見町は総面積7470K㎡と大変広い町である（東京23区の1.5倍）。その98%が山と湖沼川で、文字通り〝森と湖のまち〟である。しかし国道252号

別している。このタイプの売家は全国どこでも手に入りやすい。不動産業者が仲介してくれるところも多く、老後生活者などには向いている物件だろう。ただ、中古住宅は生活の便がいいところに建てられているケースが多く、価格も必然的に高めになる。農家の売家ならまだ1千万円以下の物件も存在しているが、中古住宅は1千万円台が主流である。補修費は農家物件ほどかからないものが多いが、それでも水回りなどの点検はするべきだろう。

地域によっては稀に農家の空家を貸してくれるところもあるが、この種の物件は簡単に手に入ると考えないほうがいい。農家にとってそれほどメリットがないからだが、どうしても貸家がほしいと望むなら最低限そこに定住する覚悟が必要だ。また、貸家の場合も補修費は借り主負担が原則となるので、一応頭に入れておいてほしい。

都会人のなかには不動産情報ばかりに気を取られて、本来の田舎暮らしの目的を見失ってしまう人も少なくない。目的のない行為は失敗に終わるだけなので、まずは自分が田舎で何をしようとするのかをじっくりと考えたい。目的さえしっかりしていれば、田舎暮らしの道は自ずと開けるはずである。

「たもかく」発行人・吉津耕一さん

を走る限り、街並みや集落が延々と続き、過疎地のイメージはどこにもない。やがて伊南川べりに只見木材加工協同組合の建物が見えてきた。

沢山の木材を収納する広大なスペースの一角に組合事務所（「たもかく」）があった。木材置場の雰囲気からは想像できない、おしゃれで明るさに満ちたオフィスである。組合員らの手づくりのモダンなテーブル、椅子、木工玩具などが配置されているせいだろうか。

同組合の専務理事で『たもかく』の発行人、吉津耕一さん（39歳）は、東京の大学を出て二年余り勤めた後Uターンし民宿を経営、冬場は東京へアルバイトにという生活をしていたが、昭和56年に組合に就職した。吉津さんは『たもかく』新年号（91年）で「只見の再生と発展」について特集し、その中で、「かつて只見川ダム建設の頃には町には3万人の人達が滞在した。個人的には人口4万人位の都市にしたいがただ人口が増えて収入が増えることを望んでいるわけではない。かつて只見を出ていった人、只見に観光で訪れた人たちがまた訪れたくなるような町にしたい。都会のマネをして施設を作ったり、どこにもあるような観光地を作るのではなく、只見町にある自然や歴史、民俗、伝統的な食べ物や行事などを生かしていくこと。必要なことはやりたいことがやれる、夢が実現するかもしれないという風土と現実をつくっていくことだ」と述べている。

只見木材加工協同組合の会員は23名、平均年齢は35歳と若い。家具師11人、建設5人、リゾート3人、事務所その他が4人。国内産の木材を作って手づくりの感覚を生かすこと、ログハウスなどの木造建築の場合はこの町に住む人を対象に20坪1000万円程度で提供するように決めている。廃材などもできるだけ活用し、古い民家の伝統を守っていく考えだ。

土地の分譲などは「たもかく」の事業として行っているが、都市の人を対象にした家は毎年10棟のペースで建設、土地は50件位を紹介している。

「土地は300坪単位で売っています。小間切れにすると乱開発になりやすいし、買う人も小遣い程度で買えると真剣さがなくなってしまいます。手放したい時は、値上げ、値下げは一切しないで売った時の価格で引き取る。20年間の敷地管理料（30万円）を前払いしてもらう代りに、たもかくの所有するすべての山林を自由に活用できます。また、建物は風景や街なみと調和するように指導しています」と吉津さん。『田舎暮らしが面白い』等の著書もあり、その筋の人気者である。

現在、月刊誌『たもかく』の読者は3000人いて、同誌が売出す物件には反響が大きい。むしろ物件が足りないほどだ。

「只見へ住みたいという人に僕は言うんです。ここは雪が何メートルも降りますよ、ここで働いて都会と同じように収入を得るのは無理ですよ。遊びにくるのはいいが定住はむずかしいですよと。そこをきちんと判ってきてくれるか、セカンドハウスとして求めるか。週末ごとに利用し、定年退職後はここに定住するという人が多いですね」と吉津さんは語る。

都会と訣別して山村へくるというのではなく、生活の中の大切な一部として山村や自然とのふれあいをまず取り入れてもらう、決してお互いに無理をしない、というのが『たもかく』の基本姿勢だ。

「たもかく」の分譲地としては、町中央部の小高い林の中にある苗畑民家村（農水省の苗木畑を払い下げたもの）と、町入口北側の集落にある布沢ログハウス村が規模が大きい。現在20戸の家が建ち、そのうちの何人かは通年定住している。

吉津さんの紹介で、布沢に住む神代さん、鈴木さんを訪ねてみた。

町内で建築中のログハウス

●「ここでの暮らしは劇的です」

布沢地区苗久保には8戸の家が建っている。電気、電話、水道を整えて300坪300万円で分譲した。

神代佳紀さん（35歳）はグラフィックデザイナー。大手出版社で多忙な毎年を送っていたが、ログハウス完成と同時に惜し気もなく仕事を辞め、布沢に移り住んだ。

奥さんはまだ東京で働いているが、月2回只見へ出かけてくる。子供はいない。

「将来は自分の別荘を持ち、自然の中

でのんびり暮らすのが夢でした。『たもかく』の吉津さんと出会い、この林に囲まれた高台が気に入ったので、即入村を決めたんです」

一階は本格的な厨房と趣味生活を生かしたリビングと居間、二階にベッドルーム、階段を利用して書棚を設けるなど、音楽鑑賞と読書三昧の日々にふさわしい贅沢な作り。年間住むことをめざし、薪をおく物置部屋なども作り、建築費に1500万円ほどかけた。

「たまに東京へ出かけますが、もうあの人混みやクルマのラッシュがいやで、すぐこちらへ帰ってきますよ。僕のように読書したり音楽を聴いたりして生活していると、人は変った人だと思うようですが、僕からみれば、ごく当たり前の人間らしい生き方だと思いますけど」

神代さんは昨年、雪の降る日々も体験、4m近い豪雪の中で暮らした。

「何しろここでの暮らしは劇的です。やることも多くひまな時間なんてありません。これからは冬の準備、窓に木枠をはり薪を用意します。冬は午前と午後は雪降ろし。クルマは下の集落へおき、ここまではスノーモービルを使います。朝起きるといろいろの動物の足跡があり、たまにタヌキの親子の姿などみかけます。実に可愛いですよ。ここの冬を体験したら、あとの生活はバラ色、つらいことも恐いこともありませんね」

昨年は『たもかく』の編集の仕事を手伝った。地元や周辺町村を中心に、編集、デザインの仕事をそろそろはじめようかと思っている。農家の仕事も手伝いたいのだが、最近は作業も機械化されているので、かえって足手まといになりそうだと、神代さんは語る。

仏像づくりに燃える鈴木佐憲さん

ストーブの前でくつろぐ神代佳紀さん

●仏像づくりの仕事場に

隣りに住む鈴木佐憲さん(53歳)を訪ねた。鈴木さんの家は民芸風の純日本風家屋。玄関脇きの一室を木工作業所にし、そこで掘炬燵を製作していた。

千葉県習志野市に住み、月の半分以上を只見へ単身赴任してくる。鈴木さんは仏像彫刻に興味を持ち、50歳の時勤め先きを依願退職、仕事場兼セカンドハウスにとここを買い求めた。

「仏像といっても僕は宗教には関心も少なく、たまたまある仏像を製作する先生と出会って自分もはじめてみたいと思ったんです。木には興味がありましたので、いろいろの木を生かして自分なりのものを作ってみたいと。まだ修業中でして、これからも仏像を売って暮らすという気はないんです」

と鈴木さんは淡々と語るが、幾つかならべられたその作品の素晴しいこと。木肌のぬくもりに鈴木さんの人柄や繊細な技が生かされて、おだやかで気品に満ちた仏像たちが並んでいる。スタンドも机も全部手づくりである。

鈴木さんの仏像を求めにやってくる人もいるが、お金はとれないので、お米や果物などをもらったという。

「ここは仕事場としても終いの棲家としても最高です。冬の豪雪期にくるのは命がけで、町でバスを降りてから8時間歩いてたどりついたこともありますが、それでも来ずにはいられない魅力があります。冬来なかったら楽しみは半減しますよ」

と鈴木さんが言えば、横から神代さんも、

「そうそう。みな豪雪地帯というと嫌がりますが、厳しい冬があるからいいんです。農家の人も、雪がくる、イヤだあといいながらも、いそいそと準備をし、雪の暮らしを結構楽しんでいるんじゃないかと思いますよ」と合づちをうつ。

冬には屋根のところまで雪が積もる

「時間」を大事に自然体で

長野県長谷村/原さん・笠井さん一家

長い冬のあとにくる春の素晴しさは格別。カタクリの花もいっぱい咲き、おひたしにして食べるとおいしいとか。ちょっと近くの山を歩けば、山菜もきのこもいっぱい採れるし、野菜や果物は農家がタダ同然で分けてくれる。こんな話をする二人は少年のように輝いている。その二人に

「奥さんはこちらに移り住む気は？」と聞くと、「女の人って現実的ですから、寒いだの買物が不便だのと言っています」「それでいい、ここは男のロマンの世界でもあるのですから」という返事が戻ってきた。

話し込んでいるうちにとっぷりと夕闇み。外へ出るとさらさらという音が林に満ち、午後から降りはじめた雨は雪に変っている。

二人は「明日から囲いの準備にとりかかりますか」と語っていた。

家が雪の中に覆われる頃、またぜひ訪ねてみたいものである。

●問／福島県南会津郡只見町　只見木材加工協同組合　☎0241(82)2945

●元家庭裁判所調査官 夜間、木工を習得して

清流にイワナやカジカが棲み、螢が舞い、高原には地元の人が「ゆめのこんぶくろ」（夢の小袋）と呼ぶアツモリ草の花が咲く――。ここ長野県上伊那郡長谷村は南アルプスの麓、人口約2500人の自然郷である。

原卓男さん(36)・かほるさん夫妻は7年前からこの村、中尾集落の住人となった。当時よちよち歩きだった亜矢ちゃんはいま小学3年生で、ここで生まれた3人の妹たちの頼もしいお姉さんである。中尾集落に40年ぶりに復活した農村歌舞伎で可憐な子役を演じて、お年寄りたちの涙を誘ったこともあるが、ふだんは男の子顔まけの元気印で、12月中旬に原さん宅に取材に訪れた時も、彼女はTシャツに半パンツという薄着で外から飛び込んできた。

その日はちょうど、同じ転入家族の笠井秀一さん(34)・涼さん夫妻とその子どもの穂(すい)ちゃん妹弟が来ていた。

デンマーク製の大きなマキストーブがある居間は、6匹の個性がオモチャ箱をひっくり返したような騒ぎで、まぶしい。4人のおとなたちは隅っこの炬燵を囲んで、しんとした空間をつくりあげて語り合っていた。彼らは子育ての達人のような気がする。

「子どもを育てるうちは田舎がいいね。大きくなったらどこでもいいけど」とかほるさん。

「田舎もいろいろでしょ。縁とは不思議なもので、それが良ければ出ていくこともないし、子どもたちにとってはふるさとだしね。ただ、子どもが自立すれば、ふらっと外国あたりに行って帰ってくるのもいいね」と卓男さん。

現在長谷村には、原さん、笠井さんの家族を含めて18家族が移住している。原さん一家はその第一号である。

原卓男さんはもと家庭裁判所の調査官。7年間に東京・京都など4ヵ所転勤した。辞令一つで動かされる生活はやめようと思い、長野県伊那市の家庭裁判所勤務を機に、県立伊那職業訓練校の夜間部で木工技術を修得した。仲間と二人で製作したテーブルとラウンジセットの修業作品が、労働大臣特別賞をとったこともはずみになった。

たまたま、長谷村の三峰(みぶ)川渓谷でキャンプしたことがきっかけでここに住みつこうかなという気持が働き、役場に相談すると熱心に入村をすすめられた。当時、過疎化に悩む長谷村では村おこし気運が高まり、「こんな所に住み

木工品を作る原卓男さん

たいなんて人はよっぽど変った人だろうが、この村が大好きなわしらも奇人変人の類じゃ」と〝奇人変人受け付け窓口〟を設けたり、空き家を仲介したり遊休地を活用する条件をつくって、入村者大歓迎の体制づくりを始めたところであった。

原さん一家は村営住宅に移り住み(現在は空家を借りている)、卓男さんは木工のかたわら村づくり委員会に参加、かほるさんは機織りの内職を始めた。

●自由にレイアウトできる自分の時間がほしいから

笠井秀一さん・涼さんは東京の下町で地域の子どもたちと遊ぶ活動の中で知り合って結婚。その当初から田舎暮らしを考えていた。6年前、知人の紹介で長谷村に移り住み、秀一さんは5年間、森林組合の造林作業員として働いた。夏には朝と夕方では体重が2キロも違うほどの重労働であったが、山の幸を入れるビニール袋をいつも持ち歩いて、「長谷村の山という山はみんなインプットした」と言う。一年前から、保健所の営業許可をとって本格手打ちそばの仕事に切りかえた。「梅庵」と名づけた予約の持ち帰りそば専門業で、地方発送も出張手打ちも受けている。そば打ちは〝木鉢三年のし一年包丁三日〟と言われて、そば粉と水分のかねあい、こねる早さなどコツをつかむのが難かしいが、もともと彫刻など物をつくることが好きで器用な秀一さんは、独学と根気のいい試行錯誤でマスターした。

笠井秀一さん、涼さん夫妻

森林組合をやめたのは「そば屋になりたかったから」で、なぜそば屋なのかといえば「遊びたいから」とのこと。このへんの動機を卓男さんがわかりやすく代弁してくれた。

「僕もそうだけど、自分で自由にレイアウトできる豊富な時間がほしいということなんだよね。たとえば、今日はいい天気だから山へ行きたいなと思ったらすぐ行けるということ。こういう暮らしは〝食う〟だけで経済と両立しがたいけど、収入源もキライな仕事でないから。しかし世間さまはその仕事であまり働かせてくれないよね」

卓男さんの場合も、注文で家具類をつくる〝木工職人〟を自負しているが、その仕事がない時は、実用にとらわれない作品、伝統工芸の精巧を極めた作品などをつくってクラフトでエッセイも書き、このほど信濃文学賞エッセイ部門の最優秀賞に輝いた。

涼さんのお仕事は?と訊くと、「お父ちゃんのお尻をたたくことが一番の仕事」と、かほるさんと顔を見合わせて笑ってはぐらかす。卓男さんが代りに「もうすぐ絵本が出版されるんですよ」と応えた。タイトルは飼っているネコの名前の『ミーニャ』。ファンタジックな絵の楽しいネコのおはなしとのこと。涼さんが絵を描き始めたのは25歳からで「赤ちゃんを育てている犬を見てて、急に描きたくなったのが最初。本格的にデッサンから習得した。『ミーニャ』は文も絵も描きためていたものを出版社(新樹社)の人に見せたら、すぐに絵本化の話にまとまったと言う。

「自分に合った好きなことをして暮らしていくには、無限に近い時間を手にしていたいんだよね」

経済より自己実現するための時間が一番大事なのだと、卓男さんはもう一度確認するように言った。

●ともに汗を流して〈おはなしの里〉づくりの夢も

その日の夜、原さん、笠井さん一家が近所の西村和裕さん・良子さん夫妻のお宅に集まって、囲炉裏での鉄板焼と梅庵の手打ちそばをたのしむことになった。

和裕さんは養豚業を営み、かたわら、すぐ近くの良子さんの実家である出口屋旅館の方も手伝っている。ちなみに、和裕さんとお父さんが丹精こめて育てる豚の肉はふつうの豚肉より格別においしいし、その肉で良子さんの弟が、本場フランクフルト仕込みの腕でつくるソーセージも抜群にうまい。

原さん一家が移住したとき、和裕さんは村づくり委員会の産業部会長として、特産品づくりやカラマツの間伐材の活用に取り組んでいた。国道256号を一部〝占拠〟して催した〈南アルプスふるさとまつり〉に豚の丸焼きを提供して盛り上げたり、若者たちとJRバスの駅舎用のログハウスづくりにも挑戦した。カラマツの伐り出し、皮むきから始める、その機材も経費も持ち出しで、各自の一日の仕事を終えてからの作業。集まりがわるいので、和裕さんは自分の都合を二の次三の次にして仲間が参加しやすいようにはからった。卓男さんもともに汗を流した。

都会から移住した人が村の人と打ち

西村さんの家で語らう、左から原さん、笠井さん、西村さん。

とけるには、この〝ともに汗を流す〟というプロセスが肝要。原さんも笠井さんも、集落の〝人足〟（共有林の下草刈りや枝払い、道普請など）やPTAの役員も積極的に引き受けている。長谷村は〝ともに汗を流す〟仕掛けに熱心で、夏には都会の子どもたちを呼び込む恒例の〈すくすくスクール〉がある。和裕さんと秀一さんはそこで800本のソーセージを手づくりしたこともある。村が主催で全国に呼びかけた〈みず・みどり・その未来〉というシンポジウムの宴では、60人ほどの役場の全職員がホテルマン顔負けのサービスに徹したし、村内の女性サークルを横につなげる成果もあった。

また昨年9月には、童話作家の松谷みよ子さんらを招いて〈親子すくすくカーニバル南アルプス大会〉というイベントを開催、全国から2700人が集まった。

このイベントは、読み聞かせによる子どもの情操教育の重要性を考えた伊那市保健所長の小林美智子さんが火を付けたものだが、原さんたちは長谷村を〈おはなしの里〉として、語りべや読み聞かせ運動のメッカにしたいと思っている。伊藤甲一郎村長も「カーニバルの熱気がさめないうちに、おかあさんがたの読み聞かせの輪をひろめ、深めていきたい」と言う。

●村にはちからがあり、家族のちからも育つ

囲炉裏から香ばしい匂いがただよいはじめ、別の部屋で遊んでいた子どもたちが集まってきた。

秀一さんは台所でそばを茹でではじめる。

「そばの世界では、茹で加減が難しいから、釜前さんは位が一番上なんですよ」

だから、ゆくゆくは出張して手打ちから茹で上げ、配膳までセットで売り込みたいと言う。「うるし塗りのでかいこね鉢をそのつど運んでいくのは大変だけどね。採算が合えば東京でもどこでも行きますよ」

実はこの商法を思いついたのは、昨年の夏の終りであった。チラシをつくって蓼科の別荘地帯へ売り込みに行ったが、もう誰もいなかったという話がおかしい。

一人前ずつ茹であげたそばを、小ぶりのざるで運んでくる。薬味は刻んでさらしたネギと大根おろし。自家製のつゆは濃いめにつくってあるので、箸にかけたそばの下半分ほどをつけてすすり込むのがコツだと言う。国産のそば粉一〇に対して割粉一をつなぎにした梅庵そばはコシがつよく、ほのかな甘みと香りが大地のぬくもりを伝えてくれる。穂ちゃんが「あたしにも!!」ととんできて、炉端にぺたっと坐っていかにもおいしそうに食べる。子どもが一番のファンとは、梅庵そばはきっと繁盛することだろう。

梅庵そばのつくり方については「近所のおばさんにも教えているよ」とのこと。長谷村でも、一面にそばの花がゆれるようになったらいいなと思う。

田舎暮らしに憧れる人は多いが、田舎に住むだけで満足するタイプと、実際に村の人びとと関わっていくタイプがあるようだ。原さんや笠井さんは後者で、それぞれの業（なりわい）を通して、地域にとけこんで、自然体でゆったりと住みよい地域づくりを営んでいるのである。卓男さんは、「田舎暮らしに憧れている人から見れば、踏み切る一歩はたいへんな段差かもしれないけれど、ぼくらはそんなことなくて、前の暮らしも今の暮らしも地つづきだし、おんなじ自分だし」と言う。

要は、主体的に生きるかどうかである。

経済性よりも自分の時間を大事にすると言う彼らの生き方。それを受け入れる地域のちからといったものが長谷村にはあるのだろう。かほるさんが、「不思議だね、ここへ来て出ていく人いないね」と言ったことも深く心に残った。

早寝の子供の一人が寝室に入ったのをしおに、散会となった。卓男さんは「これからこの子たちを風呂にいれなくちゃ」と言って、子供を抱きあげた。玄関口でぐずる妹に、亜矢ちゃんが背中を差し出した。自然に上の子が下の子の面倒をみるという家族のちから。久しく見なかった情景に心あたたまる。

キーンと冷たく澄んだ星空が美しい。

●問い合わせ／長野県上伊那郡長谷村／原さん ☎0265(98)2887 ／ 笠井さん ☎0265(98)2628

シリーズ●自然・大地からの提案

「森の住人たち」といい関係を

動物カメラマン 宮崎 学

長野県・伊那に住み、20年間にわたって森に住む動物たちの行動を撮り続けてきた宮崎学氏。独自に開発した無人ストロボカメラを使って動物たちの素顔を24時間、何年間も捉え続け、数々のすぐれた作品を出版している。自宅の作業場を訪ね、お話をお伺いした。

●写真は人家に近い森に夫婦で現われるハクビシン。愛玩用、毛皮用を目論んだ人間によって持ち込まれた外国産の動物で、今日では野生化して猛烈に増えている。

飽食の時代を迎えてキツネは、残飯を求めて人里に多く出現するようになった。

伊那谷には、突然変異で生まれた「純白のタヌキ」が見られる。ある地域には20年以上にわたって、毎年2～3頭の白タヌキが生まれているところもある。

自然・大地からの提案 宮崎　学

「森の住人たち」といい関係を

「けもの道」に現われる動物たち

現在、私が暮らしているところは伊那谷の中央アルプスの山麓。標高８２０ｍの高原といっていいほどの場所だが、別荘やペンションも増え人家が急激に増えてきている。

こんな場所にもタヌキやキツネがよくやってくる。近くの農家のトウモロコシ畑が荒されたとか民宿の残飯捨て場に何かいた、という話を聞くようになった。

我が家では、誰かが庭に捨てていったチャボのつがいを飼っていて、それが次々に子供を生み、多いときは30数羽に増えた。とくに鶏舎を設けるということをせず、彼らは屋根や納屋、クルマの上や下にもぐって自由に暮らしていたのであるが、やがてそれをキツネがねらうようになった。ボス鳥が捉えられてからはバタバタといなくなり、最終、現在２羽残った。キツネもこれ以上獲るとマズイと判断したのか、あるいは、出没していたキツネは死に、その子供たちはまだチャボという美味なエサがあることを知らないのか、このところ平穏である。

それにしても、人家やクルマの多い場所へ彼らはどうやって出てくるのか。季節や時間はどうか。動物たちの行動と生態を調べようと「けもの道」を探し、そこに無人ロボットカメラをセットした。

はじめて「けもの道」にカメラを設置したのは、いまから14、15年前で、その時は中央アルプス山中の原生林、標高１２００～１５００ｍの登山道だった。一年余にわたり、24時間の監視態勢で連絡撮影した結果、登山道は野生動物たちの「けもの道」としてしっかり活用されており、カモシカやサル、ノネズミ、小鳥までが、〝野性の表情〟で写し出されていた。

次は、私の家から６００ｍばかり離れたカラマツ林と渓流沿いにある「けもの道」。釣人もよく来るこの場所に、サルの親子、カモシカ、キツネ、タヌキ、野良ネコ、ウサギ、チン、さらにはクマまで捉らえることができたのである。

現在は、私が生まれ育った南アルプス（赤石山脈）のある集落にカメラを据えているが、人家は４００～５００ｍのところにあり、その道は郵便配達や牛乳配達の人も使う道。動物たちは、それぞれの種によって出現時期が異なるが、一般に雑草や灌木があまりに生い茂った場所より、ある程度見通しのよい道路の方が行動しやすいらしく、人間の作った林道を積極的に利用している。

タヌキやキツネのようなイヌ科動物は賢くて記憶力がよいので一度写し出されると半年位はカメラの前に現われないが、イタチやテンなどはストロボの光も気にならないのか、何回でも平気な顔で登場してくる。いつも必ず夫婦でより添うように出現するアナグマ、親子で登場するサルなど、動物たちの特性や素顔を知ることができるので興味は尽きない。最近はハクビシン、ミンクなどの外来動物も急増して、日本の森の住人たちをおびやかしている。

身近かに動物がいることを知らない現代人

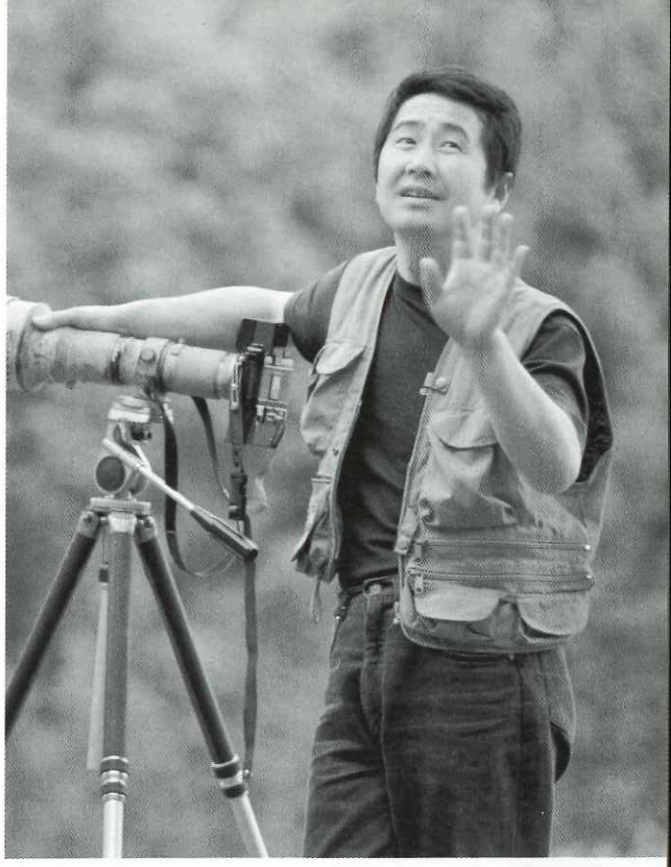
私たちは、身のまわりに多くの野生動物や野鳥、昆虫たちが生息していることを、うっかり忘れている。先日もフクロウがすぐ近くにきていたし、キツネもまだ私が書斎で灯をつけている時間にやってきたりする。

人は、自分の生活に忙しかったり関心を持たないために、身近かに動物がいることを見ていないだけのことである。

一方で、ここ数年、人口の減った山村などでカモシカやイノシシが増えて困るといった話や、都会ではカラスやカモメ、ドバトの急増などが話題になっている。

増えるにはそれなりの理由がある。人里にイノシシが出没したりするのは、その数が増えたというよりは、かつては山と里との境界あたりはもともといい作物は実らないので、多少は動物たちに食べられてもいいようなイモやヒエ、アワ、モチ米などを作って、彼らにくれてやっていた。山々はしっかり実をつけた栗や木イチゴ、木の実も多かった。人は彼らと共存していく知恵を身につけていたのである。

カラスやカモメが東京で増えているのは、彼らがエサにするゴミが増えている上に天敵がいないことがその理由。私は頼まれて埋立地の撮影に何度も出かけている。夜行って、品川沖のお台場あたりにクルマを泊めて夜明けを待っていると、ウインド・サーフィンなどにきた若者のすてていった食物クズをねら



って沢山のカラスが集ってくる。

埋立地の生ゴミは、ビニール袋のまま消毒して埋め立てることよりも、むしろカラスやカモメに積極的に食べてもらうことを考えた方がいいと思うほどである。

アメリカでは、すでにカラスやドバト対策として、都会にハヤブサなどを住まわせる工夫をはじめている。ビルなどに彼らの足場となる場所を用意してやれば、エサは充分あるから、都会でも棲息することが可能になる。日本ではカモシカやイノシシを逆に捕獲して飼育し、肉用として活用しようという動きもあるが、それも一つのアイデアだと思う。

一部の自然保護グループの中には、野性動物を食用にするなんてとんでもないという意見もあるが、狩猟民族であるヨーロッパではそれは当たり前のことだったし、日本でもマタギなどによりクマの増加をコントロールしていた。私の郷里にも、カモシカの肉を珍重する習慣が残っている。

要は、野生動物を生かし生かされながら、共存していくことである。彼ら動物たちから学ぶものは数多くあり、とくに現代人が失いつつある「命の大切さ」「野性」「生きる知恵」といったものを森の住人たちが教えてくれることが多い。

スズメは移動しながら子孫の繁栄をはかる

長野で理科の先生をしている佐野さんという人がいて、彼は毎年400羽ほどの若いスズメに個体識別用のリングをつけて調査をしている。地域別、年度別にリングの色をかえて放っているが、毎年1パーセント未満しか地元に残っていない。次の年もどーんとノーマークのスズメが入ってきて、その子供にリングをつけると、またいなくなる。

それをくり返していて、偶然岐阜の方でリングをつけたスズメが発見された。それも旅の途中のものらしかった。

私たちは、スズメは留鳥で、生まれ育った場所の周辺で生きているものと思っていた。平均寿命は1年4カ月。その間に移動しながらどんどん血を分けて優生のものを残そうとしているということに驚嘆せずにはいられない。

人間も30年サイクル位で血を分けていくと、社会はもっと活力に満ちてくるかもしれない。

農村から若者が出ていく一方で、都会からやってくる若者や年金生活者も出てきた。彼らは農業を「生活」としてよりも「趣味」として捉えているので、苦しいとか儲からないとグチを言わない。今後の村おこしの活力になり、農業をとりまく暗いイメージの打破に役立つのではないかと思う。

もっと「知恵」を働らかせて

「知恵」というものは学校の中だけでは学べない。小中学生などに動物の話をする機会も多いが、いまの子供たちの目は何だかトロンとして、おっとりしている。

僕は、野鳥や森の動物などのことをよく語ってくれた祖父の影響を受けて育ったので、登校の途中に鳥の声を聞けば、それが何の鳥で、何といって鳴いているか大抵わかっていた。

ガキ大将で、誰も「勉強しろ」とは言わなかったので学業の方はなまけたが、「学(まなぶ)」という名前をつけられた手前もあり、学校を出てからはいまも一生懸命学ぶようにしている。

ただ、実際の社会では学校で学んだ知識が生かせるということにはならない。僕も外国へ出かける機会が多いが、外国語にヨワいので、電卓の通訳機をフルに活用している。あとは手ぶり、身ぶりで、大抵コミュニケーションができる。

日本人は豊かになりハングリー精神を持っ

自然・大地からの提案 宮崎　学
「森の住人たち」といい関係を

ていないので、精一杯知恵を働かせて何かを考えるということをしなくなった。

環境とか自然、野性動物に対する考え方も、頭では理解し判っているが、具体的に一生懸命努力して何かやろうという行動力に乏しい。

こんな調子だと、あと10年、20年たった時日本はどうなるのだろうと、私はいつも不安に感じる。

次の関心は「輪廻」の世界
動物たちの死を通して自然を――

いま私が取りくんでいる新しいテーマは「輪廻（りんね）」の世界。動物たちがどのようなかたちで生を全うし、死を迎えて土に戻っていくのかについて興味があり、偶然みつけたサルの死に場所にカメラを据えて、二年間撮り続けている。

自然界には、ある動物が死ぬことによって生きていける動物がいるし、また動物のする糞で生きている生物もいっぱいいる。糞について言えば、山の中でウンコをして土をかけておけば、夏なら2時間後には地中の微生物がきれいに食いつくしてくれる。（だから、山でウンコをする時は必ず土をかけてほしい。それがマナーである）

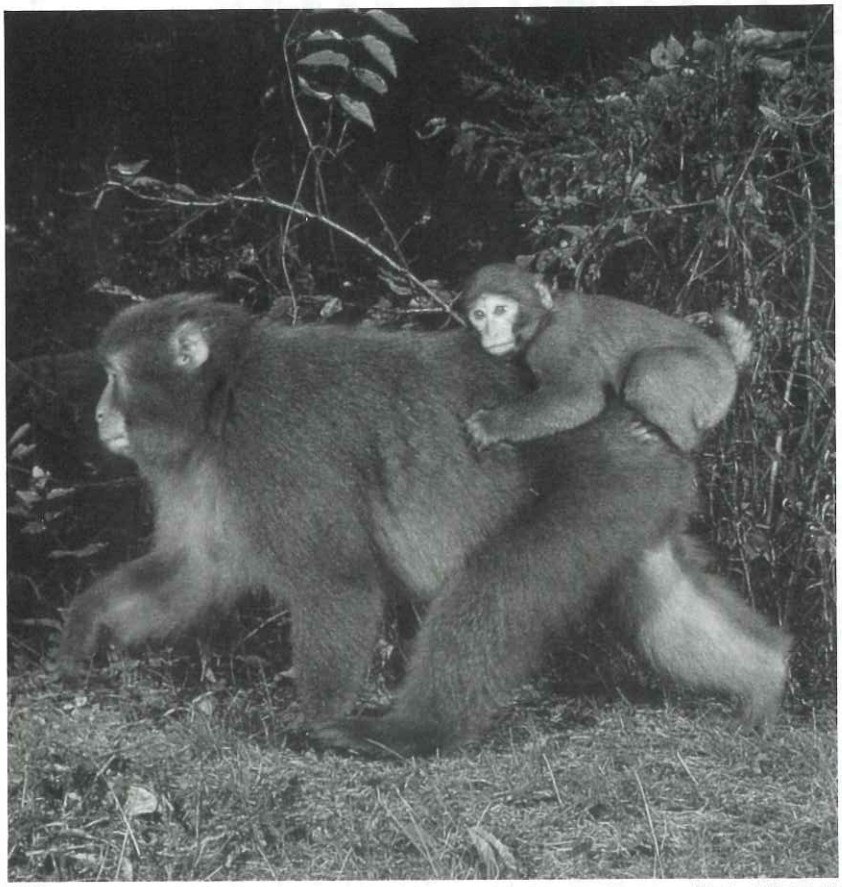
それにしても、生と死のくり返しが自然界の中でどのように行われ、それが自然のサイクルや環境とどう関っているのだろう。

このような動物たちの裏側の世界については、まだ専門的に研究調査している人たちも少なく、今までどちらかというときれいな表側の部分だけを見て動物たちを語ってきた。

生と同時に常に死がある動物たち。死を悟り、ひとり死に行くさまは厳粛で壮絶である。

一見、人間社会では何の役にも立たないと思われている生物や植物たちが、実は自然環境の保全にも大きな力を発揮している。私たちはそのことを謙虚に受けとめ、動物や植物の立場、視点にたってものを見るという機会を失わないようにしていきたいものである。

●みやざき・まなぶ氏＝1949年、長野県の伊那谷に生まれる。精密機器のメーカーに勤めた後、1972年動物カメラマンとして独立。
中央アルプスのふところ、動植物相に恵まれた環境を生かして動物写真をとり続け、「アニマ」などの雑誌や図鑑、単行本等に作品を発表。特に〈けもの道〉を中心とした哺乳類及び猛禽類の撮影では独自の分野を開拓、現在「毎日グラフ」他に連載執筆中。
著書は『鷲と鷹』『カンムリワシ』（平凡社）『ニホンカモシカ』（あかね書房）『ふくろう』（福音館書店）『クマタカの森と空』（大日本図書）『けもの道の四季』（平凡社）など多数。1978年第一回絵本にっぽん大賞、1982年日本写真協会新人賞受賞、第9回土門拳賞受賞。



中央アルプス山麓には70頭ほどのサルの群れが最低3つはあり、その群れの一つがけもの道を大移動してきたらしくカメラに次々と写し出されていた。

むらおこしは人づくりが決め手

森　巌夫（島根大学教授）

今、むらづくりは花盛り

私は仕事柄、農山村を訪ねる機会が多い。というより、年がら年中、全国各地をとび廻っている。当然、過疎地域にも頻繁に出掛ける。専門としている「農山村地域経営学」を構築するには「現場に学ぶ」ことがなによりも肝腎だと考えるからにほかならない。

ところで今、全国至るところでむらおこしやまちづくりの運動が展開されている。内容も多彩ならば動きも活発だ。かつてない賑わいがみられる。どうして、むらおこしは今こんなに盛んになっているのだろうか。

おそらく直接的には、例の竹下内閣による「ふるさと創生一億円」が刺激を与えたことは間違いない。あのお金は従来の予算仕組みとは異なって、なにに使おうが自由。しかも市町村の規模に関係なく一律の額。必然的に市町村の知恵くらべとなった。下手な使い方をすると、住民から批判を受ける。そこで、やや責任逃れの感がなくもないが、行政自ら決めるのではなしに、アンケートやアイデア募集など住民参加方式をとったところが少なくなかった。それがむらおこしに弾みをつけたことは確かだろう。

だが、より基本的には今日の農山村をめぐる情勢のきびしさをあげなくてはならない。すなわち、農山村経済の基幹をなす（べき）農林業は今、内からも外からも攻め立てられ、四面楚歌、八方塞がりの状況にある。依然として若者層の減少は止まらず、出生率は低下し、人口の自然減もあらわれている。このままではじり貧に陥ってしまう。やはり、自らの地域の活路は自ら切り開らかなくてはならない。中央政府のみに頼っているわけにはいかない。こういう危機感がむらおこしを促しているとみるべきだろう。

むらおこしを成功に導くもの

全国一斉にむらおこしが展開されているから、相互の競争がはげしい。むらおこし戦国時代などと呼ばれるのはそのためだ。そして戦国時代のなかで勝者と敗者の両極に分化しつつある。全国を均らしてみれば前者はごく少数で、圧倒的多数は後者に属する。つまり、ほとんどが苦境から脱しられずにいるが、なかには見事に活路を見出している地域もあるというわけだ。

では一体、なにがむらおこしを成功に導いているのだろうか。現場歩きを通じて得た結論（というより実感）を卒直にいえば、気象や地勢などの自然条件や交通などの立地条件の優位性では決してない。また、国や県の予算を他より早く多くふんだくってくる政治力に長けているということでもない。結局は、それぞれの地域の主体的力量、すなわち住民自身の内発力をおいてない。いい換えれば、人づくりこそむらおこしを成功させる決め手になっている。まさしく、むらおこしは人づくりに始まり、人づくりに終わるといってよい。

四つの「ち」を追放しよう

だれでも人づくりの重要性を認めるものの、これほど言うは易く、成果をあげるにむずかしいものはない。私自身、地域リーダーの育成を目的とした「塾」とか「講座」とか「学校」を各地に設けているが、世間がもてはやしてくれるほど順調に進展しているわけではない。だが、一貫して強

調している課題は、それぞれの地域から次の四つの「ち」を追放することだ。うら返しにいえば、次の四つの「ち」が横行している地域は伸びられない。

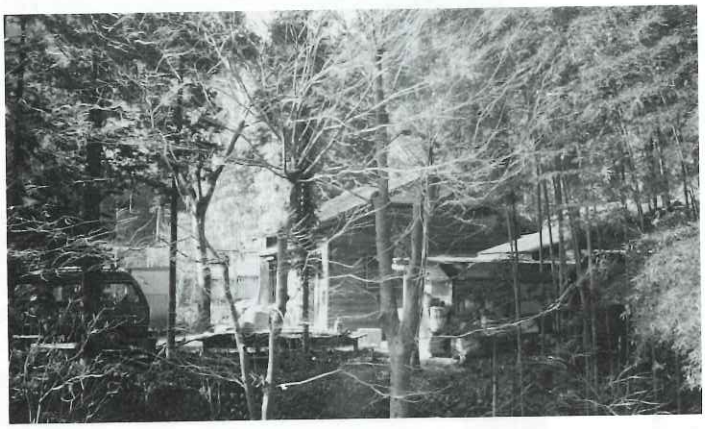
第一の「ち」はぐち（愚痴）である。リーダー自らぐち、嘆き、ぼやき、不平、不満ばかりを唱えているようでは地域に後継者が育つはずはない。活力の源泉は、自信、誇り、プライド、情熱にある。

第二の「ち」はむち（無知）。現代は情報の時代。情報にうといことを無知という。今日の熾烈なむらおこし競争に打ち勝つには地域の個性を生かす創造力、アイデアが欠かせない。ユニークさのなかで地域は甦る。

第三の「ち」はけちを指す。力の出し惜しみ、行動しないことがけちだ。どんなに高邁な理想を掲げようとも、ユニークなアイデアをひけらかそうとも実際にやってみないことにはなんの役にも立たない。実践派・行動型リーダーが今求められている。

第四の「ち」はやきもちだ。他人の健闘や成功をねたみ、足を引っ張ったり、出る釘を叩いたりするようでは新しい力は育たない。

この四つの「ち」は因となり果となって結びついている。もとより、むらおこしは一人でできるものではない。肝要なことは、地域の中の人びとの役割分担と組み合わせだ。この点に配慮して目的意識的にむらおこしに取り組んでいる農山村だけが当面する苦境を乗り切れるといえよう。



田舎暮らしのここが魅力

東京にもあった過疎の村
檜原村のぜいたく貧乏生活

山の上から眺めた東京のスモッグのもの凄さ——

「毎朝、七時か八時頃になると、東京の上空はもう灰色のスモッグで一面覆われてしまうんですよ。そんな東京の空を、毎日、山の上から一年間眺めて暮らしました」

そう語るのは藤原ジトさん（42歳）。現在、東京最奥の村といわれる西多摩郡檜原村に住む。藤原さんがこの村に住むキッカケとなったのは、9年前の山での暮らし。檜原村北部にある大岳山の山小屋で一年間ほど暮らしていた。

360度視界の開けたその山頂からは東京の町が一望のもとに見渡せた。そして、山から眺める東京はいつもスモッグの中。そんな町には住みたくないと、山を降りてからの8年間余りを、ずっとこの檜原村で暮らしている。

藤原さんは陶芸家。この村の村営住宅に窯を作り、奥さんと2歳になる〝まどちゃん〟との三人暮らしだ。

檜原村は人口3,880人の村。東京の町から平日ならばクルマで一時間ちょっと。しかしその一時間余りの間に、風景は一変し、辺りはそそり立つように急峻な針葉樹の山また山となる。コンビニも街道沿いの外食レストランも見当らなくなってきた。なにしろ村の総面積の9割以上が山林で、村の大半が秩父多摩国立公園に含まれているというところだ。この村がれっきとした東京都なのだといわれても、大抵の人は驚くことだろう。

藤原さん一家の住む村営住宅は、村を流れる南秋川の清流沿いに建っていた。藤原さんはその日、敷地内に作られた手作り窯のある仕事場で作業をしていた。

「こんにちは」と声をかけると、人なつこそうな優しい顔が振りむいた。頭には白いタオル。木綿のシャツ。陶芸家などというから、藍染めの作務衣でも着てうやうやしく挨拶されるのかと思ったら、何とも無造作でかざり気ない人である。

庭先きに、これも手作りのどっしりとしたテーブルと椅子。気持ちのいい陽だまりのこのテーブルを囲んで「檜原暮らし」の話が始まった。

「もともとこの周辺の山が好きでよく歩いていたんです。檜原村は麓の村ということで馴染みがあったんですね。大岳山の山小屋で一年間ほど働き、結局この麓の村に定着して、もう8年になります。村がこの村営住宅を借りてくれたので、何とか焼きものなどをしながら、山で知り合った嫁さんと結婚して、子供も生まれたわけです。」

出身は広島県の福山という藤原さんにとって、都会のせわしない暮らしはもともと性に合わなかったのだろうか。東京近辺をあちこちと住みながらも、結局落着いたのはこんな静かな山里だった。

「焼きものを焼いて、生計は細々とたてていますが、そんなにお金を使うこともないし。お金がかかるのは焼きものに萩焼きの土を使っているので、土を取り寄せる代金とか、燃料代とかですかね」

藤原さんはにこやかに、淡々と話す。傍で奥さんが頷く。

「こんな山奥にも生協が来てくれるので助かるんですよ。野菜は近所の人が届けてくれたり。子供がもう少し大きくなったら畑も作ろうと思っているんです。」

奥さんも檜原村での暮らしを楽しんでいる。

大人が子供を追い出している

檜原村は、東京都で島を除く唯一の過疎の村。なまじ都会が近いせいもあってか、若者たちはどんどん村を出ていくという。

そんな村の過疎化に対して、藤原さんは独自の意見をもつ。

「若者が街へ出ていくのは、今に始まったことではないし、そのこと自体悪いことだとは僕は思いません。過疎化の問題はもっと視点を変えて、100年、200年という単位で考えていくことだと思うんです。村を守ろうという発想からスタートするのではなく、村で暮らす人間たちがどう生きるのか、そのことをちゃんと考えることの方がどれ程大切かということです。

都会のような生き方を大人たちがしようとするから、村もどんどん変わってくる。もっと人間として、生きる喜びのようなものをしっかりと持っていれば、子供たちは小さい頃から気づきます。それがないからこんなとこ何もないということになる。子供たちを村から追い出しているのは、結局大人たちなんです。過疎化対策というのは施設を作るとか、そんなことで解決する問題ではないと思うんですよね。」

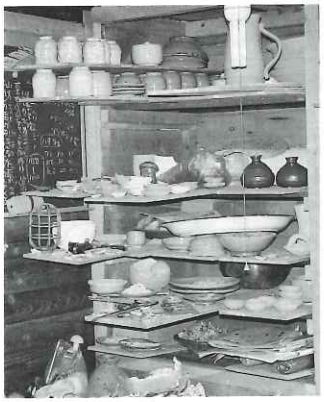
その言葉を裏付けるかのように、藤原さんの暮らしからは、もの欲しがらずにゆったりと生きている充実感のようなものが、感じられる。質素だが、考えようでは何というぜいたくな暮らしだろう。

せせらぎ、風の音、おいしい水。夜には真暗な闇が訪ずれ、見上げれば満天の星空が広がる。心静かに制作に向かう日々。こんな暮らしがあったんだなあと、教えられる。情報に振り回され、クルクルと空廻りしている都会の暮らし。その反対側にこんな人たちがいる。

藤原さんは書家でもある。家の中でその作品の数々を拝見した。勢いのある筆が奔放に紙の上を走っている。作品の中に「楽陶然」と書かれた書を見つけた。陶然として楽しく。それは藤原さんの暮らしに流れている背骨のような言葉に思えた。

峠をひとつ越えればそこはもう山梨県。東京最奥の村、檜原村に気持ちの良い風が吹いていた。

陶芸家・藤原ジトさんと作品(下)



都市から農村へ

ダイエーは全国に2T5の店舗を持ち、ローソン、サンチェーン・グループを含めると全国7500店にも及ぶ。

新鮮でおいしいものを、できるだけ安く、安定的に供給することが常に求められるわけだが、そのためにどのように生産者とネットワークしているのだろう。

野菜、果物、生花の仕入れを担当するフーズライン商品本部、マネージャー佐藤徹郎さんにお話をお伺いした。

農家の協力を得て、よい品を安く
「すこやかベジタ」をめざすダイエー・フーズライン本部

港区芝公園の浜松町オフィスセンター内にあるダイエー本部。このところ野菜や果物の不作、台風の被害で高値が続いていたため、取材が連日のようにあり、多忙な毎日が続いたという。

フーズライン本部佐藤徹郎マネージャーは全国各地の生産地はもちろん、ニュージーランドやオーストラリアあたりへもすぐ飛んでいくという人だけに、行動力と管理能力は並みの凄さではないと思うのだが、それを感じさせない大陸的な雰囲気の人である。

●野菜の6割は生産者との契約栽培で

はじめに、野菜の仕入れについて伺った。

「野菜の場合は、6割が農家や生産組合、森林組合などとの契約栽培によるもので、あとの4割は市場から仕入れています。ダイエーが直接農場を持ち生産・加工までしているのは肉類だけです。

私は基本的には100%国内で自給していくのが理想だと思っています。日本は自然条件にも恵まれている上に生産者たちの努力により、一年中新鮮な野菜が供給できるようになっています。春から夏は九州や四国から、夏から秋は東北や北海道からといった具合に特別なことがなければ、基本的には国内でそろいます。

しかし、昨年のような不作が生じると大変です。品不足というわけにはいかないのです。価格もできるだけ安くしたい。それで急遽、アジアやオーストラリア、ニュージーランドなどから仕入れました」

アスパラは南半球、オーストラリアやニュージーランドでもとれるし、白菜は韓国が本場で品質のいいものが入ってくる。その気になれば外国から安くて鮮度のいいものを取り寄せることは可能になっている。低温コンテナで鮮度をそのままに保つ仮睡状況にして運搬するからである。それは国内産の生鮮野菜の場合も同様である。

「国内では各地区に担当のバイヤーがいて、生産地を訪ねたり、緊密に連絡を取り合って

フーズライン本部の総括マネージャー佐藤さん

います。関東や近畿などは生産者と直接取引きしていますが、岩手県などは農協を通して仕入れます。規模の小さな産地からもさまざまな産物が入ってきて、レパートリーを広げることになります。

ダイエーではりんごやじゃがいもなどのオーナー制度を設けていて、こちらの方も好評です」

ダイエーには数十名のバイヤーがいて、各地の生産者を訪ねて事前に打合せをしている。

「しかし最近は、後継者がおらず60歳、70歳すぎた人が現役でやっています。この先、オーナーとしてやっていけるか心配という人もいて、我々も心を痛めています」と佐藤さんは言う。

●包装はできるだけ簡易に

「よい品をどんどん安く」がダイエーのキャッチフレーズになっている。安くするための工夫をどのようにしているのだろう。

「契約農家とは価格の点で当方の希望を伝え安くするようお願いしています。その代り、従来のように、一つ一つをていねいに包装したり、こまかにランクづけをするという手間をできるだけ省くようにしています」

そういえば、最近ダイエーの野菜売場で目につくことは、キャベツ、キュウリ、ほうれん草、大根、じゃがいもといった主な野菜がケース陳列とは別に、裸のまま小高く積まれて売られていることである。包装をできるだけ省こうということの他に、新鮮な野菜にじかにふれて選べるという市場的な楽しさがある。

キュウリなどの場合、見た目にスマートなだけでなく少し曲ったりしているものも売られるようになり、消費者は何の抵抗もなく買っていく。

「キュウリの場合、規格、サイズ、グレードが細分化されており、選別に大変な手間とコストがかかっています。当社では選別や包装の手間、無駄をできるだけはぶいた販売形態を農家の協力を得て行っています」

と佐藤さんは語る。

昨年の台風で被害の出た青森りんごを大量に〝支援販売〟したのもダイエーだった。

●「すこやかベジタ」の提供を

最近、有機栽培とか低農薬野菜をというニーズが強くなってきたが、ダイエーでは「すこやかベジタ」のネーミングで、からだによくおいしい野菜・果物の提供をめざしている。

品質管理センターが26項目の農薬をチェックし、残留農薬がないものを販売するように指導している。

「無農薬では商品として成り立たないわけですから、それを消費者に正直に言って最低限の使用にし、残留農薬のないものを販売しているということを理解してもらう必要があります」

国民の野菜を食べる量は横ばいか、やや下っている傾向にあるが、金額的には延びているようだ。

一方、果物の方は、7割が国内産、3割が海外もの。グレープフルーツのように昭和47年にアメリカから輸入ものが入ってきて、日本の台所に定着したものもあるが、チェリーなどの場合は、アメリカ産のチェリーの販売量は伸びているが、日本のものの方がおいしいというイメージを持っている人も少なくない。

●農村問題は消費者の問題です

いま農業は後継者不足や就労者の高齢化、農業では食べていけないという声もあって、農業離れが続いている。それに関して、例えば人手不足の過疎町村などへダイエーの若い社員を派遣するとか、ダイエー直営農場を設けるというようなことは検討していないのだろうか。

佐藤さんは、

「スタンドプレーをしても何の解決にもなりません。当社では、農業が魅力ある事業になるためのお手伝いを積極的に行っていきたいと考えています。そのために、我々の仕様に基づいた契約栽培を、農家の協力を得て拡大していきたいと思っています。

農業問題は国民全体で考えていかなければならない問題です。野菜は、他の商品に比べ

「すこやかベジタ」のポスター

好きな野菜を計り売りで

てみても、こんなに安くておいしくて健康に役立つものはないんです。

農家の人も、もっとプライドと自信をもってやってほしいと思いますね。そのうちに、売手市場の時代になるかもしれません。その位附加価値の高い商品なんです」と佐藤さんは強調する。

●生花を手軽に楽しむように

今後ダイエー青果部がめざす市場計画について聞いてみると「よい品をどんどん安く」という基本は変らないが、新しい動きとしては〝花部門〟に力を入れていく計画だという。

今まで生花市場は独占的で、バラ一本が何百円もするなど、かなり高価になっている。

ダイエーでは数本をセットにし一束200～300円で売っているが、今後は生花業界に風穴をあける意味もあって、花が手軽に買えて生活の中にもっと楽しめるような仕入ルートを確立し、販売に力を入れていく計画である。

外食産業も新たな時代に。
ライスバーガーは日本の風土に合ったおいしさ——(株)モスフードサービス

年々、急成長を遂げている外食産業。厚生省の国民栄養調査（平成元年度）では、国民の食事の18・7%をこうした外食産業が支えているという。首都圏では弁当産業なども含めると、一日のうち一食は外食というのが、もはや普通になってきた。

国民の食生活と大きく関わることになるこうした企業にとって、食材の安全性や生産地との関わりをどう捉えられているのだろう。

全国に1078店舗、年商790億（平成3年12月期）というビッグビジネスを展開しているハンバーガーチェーン・モスバーガーの本部「モスフードサービス」を訪ね、話を訊いてみた。

●〝安全でおいしいもの〟が大原則

モスバーガーといえばすぐに頭に浮かぶのが、あの大ヒット商品となった〝ライスバーガーシリーズ〟。ハンバーガーにごはんを使うという奇想天外な発想に、驚かされた人も少なくないだろう。この発想のしなやかさ、ユニークさがモスバーガーのモスバーガーたる由縁（ゆえん）である。

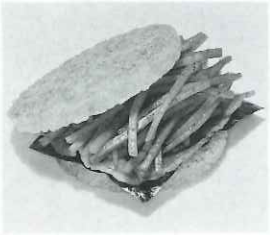
何しろハンバーガー＝ケチャップ味という常識を最初にひっくり返したのも、このモスバーガーだった。日本人の口に合うみそ、しょうゆを、アメリカ生まれのハンバーガーに取り入れるという大胆さ。テリヤキバーガーとして開発されたこの商品は、予想通りにヒットして多くのファンを生んだ。

現在、モスバーガーはファーストフードでは国内最大のチェーン網をもつ。全国に1078店舗。それは言いかえれば私たちの食生活とも、いかに大きく関わっているかということだ。

特にモスバーガーの場合、客層は若者一辺倒というより、子供から老人までと幅広い。そして、ファーストフードはかつてのように〝間に合わせの食事〟ではなく、気分を変えて家族で楽しむという、より積極的なニーズへと発展してきた。

そうしたニーズに応えるためにも、モスバ

モスバーガーの店内


きんぴらライスバーガー

テリヤキバーガー

ーガーでは〝家庭の台所〟という認識を大切にし、食品の安全性を常に重視してきた。商品部和具忍仕入課長はいう。

「扱う素材すべての安全性については、細かくチェックしています。例えば、きんぴらライスバーガー。このきんぴらに使うしょうゆはどういうもので、どんな添加物が入っているのか、そんなことも洗い出して、無添加に近づけるための努力を重ねています。」

こうした安全性や衛生面などをきちんと管理するために、「モスサプライ」という別会社を設け、ここで食品の品質や衛生面の管理を徹底させている。「安全でおいしいものが食べたい」というのは、顧客の一番の要望であり、モスバーガーの大原則でもあるのだという。

●農家は今後のよきパートナー

現在、モスバーガーでは野菜の仕入れは各店ごとに、近所の八百屋を通して購入している。店舗が全国に分布していることや、葉物類の鮮度を保つのが難しいことなどから、一括仕入れは現状ではまだ行われていない。

しかし店舗数も1000店を上廻り企業としての力もついてきた今、次なるステップとして、産地の掘り起こしが課題となってきた。

和具仕入課長らはここ数年、「日本フードサービス協会」のメンバーたちと、全国の農村を歩いて廻り、パートナーとしていっしょに取り組める産地や農家の発掘に力を入れている。

和具課長はいう。

「我々外食産業が、仕入れに際していわゆる流通業と大きく違うのは、すべてを加工して使うので、人参が曲がっていようが大小バラバラだろうが、いっこうに構わないということです。それと常に一定量を安定的に買わせていただく訳ですから、農家の方にとってもメリットは大きいと思います。年間何千トンという量を必ず買いあげますから。

ただ農家の方にとっては市場価格の高い時には、高い方へ出したいという気持があって、その辺のギャップがまだまだ埋まっていないんですね。」

一定量を一定価格で買いあげるというモスバーガーの方針は、市場の相場によって農家を一喜一憂させることになるのだろうか。

しかし昨秋、異常に野菜が高騰した際にはモスバーガーも泣いた。

「テリヤキバーガーなどには約30gのレタスを入れているんですが、異常な高値が続きましたでしょう。正直言って売れれば売れるほどマイナスになりました。だからといってレタスの量を減らすことは絶対にしたくない。サラダなども同じことでしたが、『モスバーガーに行けば野菜が食べられる』といって来店してくださるお客さまを裏切りたくありませんでしたから。一年を通して見れば、わずかな期間だというふうに考えました。」

と和具課長は話す。

●村の活性化にも役立ちたい

日本で店舗を構え、日本でビジネスを展開する以上、そこの土地や風土に合った食べ物を提供していくのが理想的。モスバーガーはそう考えている。「医食同源」という明快なコンセプトをもつこの企業は、商品企画もすべてこの視点から進められる。

しょうゆ味のテリヤキバーガーやごはんに新たな光をあてたライスバーガーの開発、そして最近では〝モス畑〟という人参やコンニャクなどを使ったドリンク類。野菜不足、繊維質不足の現代人にピタリと照準を合わせた新商品である。

この「医食同源」をつきつめていくと、やはり日本の風土に合った食材ということが重要なものになってくる。その適切な産地を探すこと、ひいては過疎化の進む村の活性化に何とか役立ちたいと、モスバーガーのスタッフたちは考えている。日本の農産物をビジネスの基盤にしたいと考える以上、日本の農業と無関係でいられる筈がないという。

すでにいくつかの外食産業が農場経営などにも乗りだしているが、モスバーガーもいずれ近い将来、直営農場をもち、素材の生産から加工・販売まで一貫して取り組んでいきたいと考える。「農場は村おこしの拠点となるようなものにしたいですね。地域の人たちと都会の人たちがより良く生きられる場にならなければと思います。」

と和具仕入課長は直営農場への夢を熱っぽく語る。

一個のライスバーガーの中に、こんなにたくさんの苦労や夢が詰まっていたのかと思うと、もっと味わって食べてみたくなった。

〝家庭の台所〟の延長でと語る商品部和具仕入課長(左)

EVENT
DePOLA INFORMATION

桜、つつじに草もち、山菜…

ふるさと花まつり情報

ただいま桜前線北上中。九州は3月末から4月上旬、北陸・東北は4月末から5月上旬。北海道は5月中旬から6月にかけてあらゆる花が一斉に開花します。続いて、各地からつつじ、あやめの花便り。萌ゆる新緑と花々の下で多彩な行事が行われます。

桜の開花に合わせながら、各地(過疎地域)の主な花まつり等をご案内します。

・祭り名(開催市町村)／主な内容／開催予定日／㊐は問い合わせ先の町村窓口と電話番号(電話番号は代表番号のため、課・部名を告げてください)

【九州地区】

●**金海山釈迦院花まつり**(熊本県泉村)
西の高野山といわれる金海山大恩教寺で桜の開花と釈迦の誕生を祝って。4月8日。㊐役場観光課☎0965(67)2111

●**湯山温泉桜まつり**(熊本県水上村)
桜吹雪の下で花見酒と温泉を。3月下旬～4月上旬。㊐役場経済課☎0966(44)0311

●**岡城桜祭り**(大分県竹田市)
桜並木の下で、岡藩大名行列、駕篭かき競争などが行われる。4月第一金～日曜日。㊐観光協会☎0974(2)2384

●**梅園祭**(大分県安岐町)
江戸時代の哲学者、三浦梅園の遺徳をしのび、梅・桜を鑑賞したり小学生の作文発表、記念講演会。4月30日。㊐役場教育委員会☎09786(7)0270

●**仙崎つつじ祭**(大分県蒲江町)
仙崎山の頂上にはつつじの大群落があり、眺望もすばらしい。4月中旬頃。㊐役場産業課☎0972(43)3940

●**しゃくなげ祭り**(大分県朝地町)
神角寺は、しゃくなげの群生で観光客にも人気。4月下旬から5月上旬まで。土・日曜日は市も出て賑わう。㊐役場産業課☎0974(72)1111

●**普光寺あじさい祭り**(大分県朝地町)
同寺はあじさいで有名。6月中旬から7月上旬が見どころ。㊐役場産業課☎0974(72)1111

●**しいたけフェスティバル**(宮崎県椎葉村)
特産品しいたけのコンクールと即売会。農林産物の即売もある。4月中の土・日曜日。㊐役場産業課☎0982(67)3111

●**和牛・山菜フェスティバル**(宮崎県椎葉村)
特産品の和牛を利用した野外パーティで山菜料理もたっぷり。即売会、釣り大会も。4月下旬。㊐役場総務課☎0982(67)3111

●**湯ノ山公園夜桜祭り**(鹿児島県入来町)
公園内は桜の名所。夜はネオン灯をともし、花見客で賑わう。3月下旬から4月10日頃。㊐役場内観光協会☎0996(44)3111

●**ゆり祭り**(鹿児島県和泊町)
島の青年たち手づくりのエラブユリで飾りたてた花車のパレードをはじめ郷土芸能の数々を披露。4月第四日・月曜日。㊐役場経済課☎0997(92)1111

【中国・四国地区】

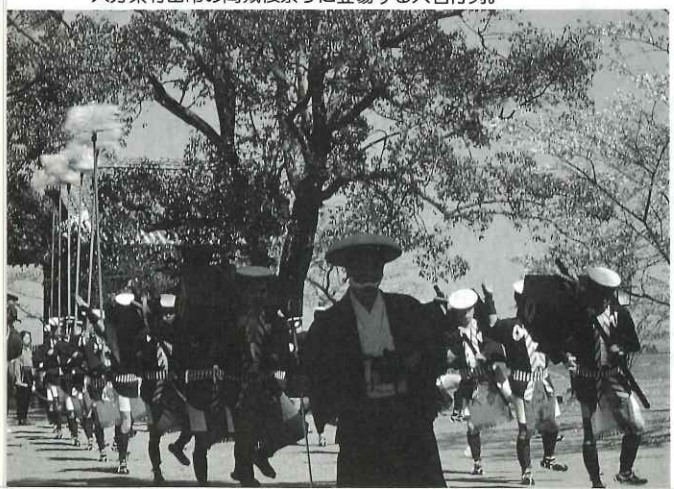
●**つつじ温泉まつり**(鳥取県関金町)
町も周辺の山も一面美しいつつじの花が咲き、温泉は数々のサービス、イベントで。4月第三土・日曜日。㊐温泉観光協会☎0858(45)2111

●**ぼたん祭**(島根県赤来町)
赤名ぼたん園には1万㎡の敷地に30種6000本のぼたんがあり、標高500mの高原からの眺めもすばらしい。5月中旬～下旬。㊐役場産業課☎0854(76)2211

●**お田植祭り**(岡山県八束村)
氏子たちが苗代から田植までの所作を演じたり、神社に神楽を奉納する。5月5日。㊐役場教育委員会☎0867(66)2337

●**あやめ祭**(広島県上下町)
ミスあやめのパレードなど行事もいろいろあり。矢野温泉街の安福寺には120種5万本のあやめが見事。5～6月。㊐観光協会☎08476(2)2111

大分県竹田市の岡城桜祭りに登場する大名行列。



岡山県八束村「お田植祭り」
神社に田植用具を供えて田舞い、神楽をあげて田植えの式を行う。

●**ホタルまつり**（山口県豊田町）
6月になるとホタルの里は幻想的なホタルの舞いが楽しめる。最盛期の上旬土曜日は2回にわたって前夜祭や祭典でにぎわう。㊐役場経済課☎08376(6)1050

●**花まつり**（広島県総領町）
田総市として昔から8日には市が立っていたもので、旧暦の釈迦誕生日にも当たる。5月8日。㊐龍興寺☎0824(88)2851

●**塩江さくらまつり**（香川県塩江町）
特産品の直売、もちつき大会など。夜桜も楽しめる。祭りは4月上旬の日曜日。㊐観光協会☎0878(97)0131

●**田尾城つつじまつり**（徳島県山城町）
田尾城跡一体のつつじ開花を記念して剣舞、詩吟、カラオケ、特産物の即売会などを実施。4月中旬の日曜日。㊐観光協会☎0883(86)2432

●**ほたる祭り**（徳島県山城町）
山城町赤谷は源氏蛍の里。6月上旬の最盛期には土・日曜日に祭りを開催。㊐役場経済課☎0883(86)2432

●**さつき祭り**（愛媛県日吉村）
さつき盆栽約300鉢、苗木資材の即売、夜市など。6月開花時。㊐役場教育委員会☎0895(44)2211

●**花まつり**（高知県本山町）
桜、シャクナゲ、ツツジの開花期に合わせて各種の催し物を開催。4月上旬～5月下旬。㊐役場産業課☎0887(76)2113

【東海・近畿・北陸地区】

●**神岡まつり**（岐阜県神岡町）
高山祭、古川祭とならんで飛騨の三大祭り。桜吹雪の下で神楽、獅子舞いを演ずる。4月24、25日。㊐役場観光課☎0578(2)2250

●**花の川根路・家山さくら祭り**（静岡県川根町）
お茶と温泉が名物の川根のさくら祭り。特産品即売会なども開かれる。3月下旬から4月中旬まで。㊐商工会☎05475(3)2170

●**さくら祭り、さくらマラソン**（静岡県龍山村）
秋葉ダム湖畔に咲く桜並木の下でバザーや各種サービスなど花見の宴。3月下旬～4月上旬。㊐役場産業課☎0539(69)0311

●**荒滝不動尊つつじ祭り**（三重県飯高町）
数千本のつつじの名所で、初夏から滝不動尊の一帯はキャンプ場になる。つつじ祭は4月29日。㊐観光協会☎05984(6)1111

●**花供会式**（奈良県吉野町）
今から千年余り昔、白河法皇の病いを治した高僧がその礼に全国から米を集めて村人にふるまったという行事が桜の下で行われる。4月11、12

参加しませんか！萌える春にリフレッシュ
●スポーツ&イベント・ガイド

●**錦秋湖マラソン**（岩手県湯田町）
湯田温泉郷の景勝地錦秋湖を10km、20kmコースで走る。前夜祭には水上花火、綱引き大会等多彩な催しも。5月最終日曜日。㊐役場商工観光課☎0197(82)2111

●**古湯・能の川健康マラソン**（佐賀県富士町）
古湯～能の川間の国道323号線3km、5km、10kmの3つのレースを開催。4月中旬。参加費500円。㊐役場教育委員会☎0952(58)2111

●**観光サクラマラソン**（熊本県水俣市）
桜の満開を楽しみながら湯の児温泉と湯の鶴温泉で交互にマラソン大会。いい汗かいたあとはたっぷり温泉で。4月第一日曜日。㊐役場教育委員会☎0966(63)1111

●**杖立温泉小国史跡めぐりマラソン大会**（熊本県小国町）
温泉浴、森林浴、食欲をテーマにした健康マラソン大会で各地の史跡をめぐるコース。参加料2500円。5月11日。㊐観光協会☎0967(48)0206

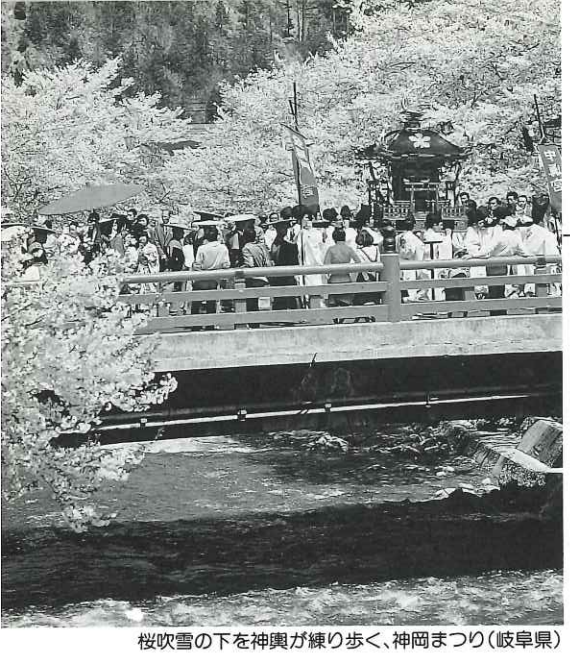
錦秋湖マラソン

●**若桜氷ノ山・中高齢者全国マラソン大会**（鳥取県若桜町）
新緑の氷ノ山路を9部門に分かれて健脚を競う。全国各地から中高齢者が集う。5月第三日曜日。㊐役場教育委員会☎0858(82)1111

●**にちなん湖畔マラソン大会**（鳥取県日南町）
第14回目を迎える人気のコースで、2km、3km、5km、10kmコースがある。血圧測定、湯茶、みそ汁等の接待もある。5月最終日曜日。㊐役場教育委員会☎0859(82)1111

●**観光凧揚げ大会**（愛媛県五十崎町）
毎月第2日曜日は市と凧揚げ大会をほぼ一年中実施。135cm×165cmのけんか凧が有名で、揚げ方、作り方を指導してくれる。料金凧一式300円。5月5日は畳2枚程の凧が数百統揚げられる。「いかざき大凧合戦」（県無形文化財）を開催。㊐役場観光協会☎0893(44)2121

EVENT
DePOLA INFORMATION


桜吹雪の下を神輿が練り歩く、神岡まつり（岐阜県）

日。問吉野山金峯山寺宗務庁☎0746 3(2)3022

●**二川ダム湖周辺桜まつり**（和歌山県清水町）
ダム周辺には数千本の吉野桜が植樹されており、期間中は餅投げ、青空市場、カラオケ大会などを開催。4月5日～15日頃。問役場企画室☎0737(25)1111

●**五箇山春まつり**（富山県平村）
桜が咲き一番美しい季節。夕方から灯がともり夜おそくまで獅子舞いや五箇山民謡の踊りの輪が広がる。4月20～5月6日。役場産業観光課。問☎0763(66)2131

●**白山の野鳥と昆虫観察会**（石川県白峰村）
白山の自然を散策し、野鳥や昆虫、植物を観察、昼食には白峰名産「堅ぶどう」をサービス。6月上旬日曜日。問役場総務課☎0761 9(8)2011

●**水芭蕉観察会**（石川県白峰村）
水芭蕉鑑賞後、昼食時には白峰名産のぶどう酒と山菜料理で。5月上旬日曜日。5月下旬には「若葉まつり」山菜・特産品即売会、バーベキューコーナーなど。問役場総務課☎0761 9(8)2011

【関東・甲信越地区】

●**龍神ふるさと村開設**（茨城県水府村）
5月1日オープンして11月末まで開村。雄大な眺望地で、そば、うどん等の試食会、即売会。問龍神ふるさと村☎0294(87)0234

●**たけのこ祭り**（栃木県馬頭町）
静神社例祭で、屋台や市がでて賑わう。採れたてのたけのこや山菜を格安で。5月1・3日。問観光協会☎0287(92)2521

●**平家大祭**（栃木県栗山町）
緑かおる湯西川地区の観光行事。2000名余の武者行列が町内を歩き、平家落人の里をしのばせる。6月5日～7日。問平家大祭実行委員会☎0288(98)0026

●**御荷鉾山登山ハイキング**（群馬県万場町）
標高1200mの東西御荷鉾山は山桜、つつじも美しい。毎年老若男女1200名以上が登山を楽しむ。4月29日。また同じ頃、地区住民が集まり、直径110mに及ぶ「大文字」の草刈りが行われる。問役場総務課☎0274(57)2111

●**塩川温泉まつり**（群馬県小野上村）
渓流沿いの温泉は新緑と桜、つつじの季節。山菜料理や草団子のサービスも。4月26日。問役場総務課☎0279(59)2111

●**おひながゆ**（群馬県上野村）
昔から伝わる子供たちの行事で、川原に石積の城を作り、その中でかゆを食べて一日遊ぶ。4月3日。問役場企画財務課☎0274(59)2111

●**妙義山さくらまつり**（群馬県下仁田町）
奇岩霊山で知られる妙義山麓は桜の名所でもある。開花期に併せてファッションモデル撮影会、特産品即売会、カラオケ大会等を開催。4月中旬～5月中旬。問観光協会☎0274(82)2111

●**両神山の春まつり**（埼玉県両神村）
両神山は春のハイキングに最適。期間中、村内の山家に宿泊した方にプレゼント贈呈。4月上旬～5月中旬。ヤシオツツジが見頃。問観光協会☎0494(79)1100

●**仏法僧を聞く会**（埼玉県両神村）
ブッポーソーは両神山中腹の清滝小屋周辺に営巣している。5月1日～7月10日。問観光協会☎0494(79)1100

●**武田まつり**（山梨県大和村）
武田勝頼公一族の菩提寺、景徳院を中心にした祭りで、桜、桃の花見をかねて開催。4月11日。問武田まつり実行委員会☎0553(48)1211

●**南アルプス早川山菜まつり**（山梨県早川町）
新緑、桜の開花に合わせて、山菜や山取り盆栽、農林物産の直売会、歌謡ショーなど。毎年1万2000人以上が参加。5月3日。問役場企画課☎0556(45)2511

●**高遠城まつり**（長野県高遠町）
「さくらさくら」の作詞者伊沢修二を生んだ高遠町名物の桜は「さくら日本50選」にも入る名所。4月中旬から下旬が見頃で、祭り（4月中旬）には高遠まんじゅうの早食い大会も。問観光協会☎0265(94)2551

参加しませんか！
スポーツ&イベント・ガイド

●**秋神川あまご釣り大会**（岐阜県朝日村）
秋神川は釣人に人気のあまご、いわなのメッカとして有名。新緑のハイキングをたのしみながらご家族でどうぞ。4月第四日曜日に釣り大会開催。問飛騨あさひ観光協会☎05775(5)3529

●**探鳥会**（長野県売木村）
4月下旬、5月下旬に各1回開催。前夜は休養村センターで小鳥教室。翌朝アケビ平小鳥の森でバードウォッチング。植物観察にも最適。問役場産業課☎0260(28)2311

●**ハンググライダー大会**（新潟県吉川町）
民神岳ハンググライダーエリアにおいて県内外の選手による大会が5月上旬、7月下旬、9月下旬、10月中旬の4回実施される。問い合わせは民神岳ハンググライダーエリア協会（役場産業課内）☎0255(48)2311

●**佐渡の民謡、ささ織り修得会**（新潟県相川町）
佐渡おけさを鑑賞後、プロの指導でおけさ踊りを修得、修得証をもらえる。佐渡会館で5月～9月の土曜、祝日前夜8時50分～。問観光協会☎0259(74)2220

●**赤沢森林浴写真撮影会**（長野県上松町）
新緑とつつじの赤沢自然休養村で、モデル撮影会。入賞者は夏まつりに表彰し記念品贈呈。5月17日。問観光協会☎0264(52)2001

●**水ばしょう祭**（長野県鬼無里村）
水ばしょうが美しい村。祭りには町特産品のあざみ漬けプレゼント。鬼紅葉太鼓、鏡割り、升酒サービスなどがある。4月末日～6月上旬。問観光協会☎0262(56)2211

●**真野公園さくら祭り**（新潟県真野町）
公園には約600本の桜の老木があり、美酒をくみ交し、伝統芸能を鑑賞する。4月19日～5月5日。問役場商工観光課☎0259(55)3111

●**荒川峡さんさい祭り**（新潟県関川村）
午前中は山菜をとり、午後は荒川峡温泉組合員の腕自慢の山菜料理の賞味会を行う。5月下旬の日曜日。問観光協会☎0254(64)1441

●**五頭連峰山開き**（新潟県笹神村）
山頂までの登山者には記念品贈呈。五頭温泉旅館ペア宿泊券や物産品も当たる。5月3日。問役場商工観光課☎0250(62)4141

●**探鳥会**（新潟県高柳町）
鯖石川ダム周辺は野鳥の宝庫。花見、山菜狩りもかねて一日ハイキング。5月末。問役場観光振興会☎0257(41)3391

●**山菜を楽しむ会**（新潟県松代町）
春の味覚、山菜料理を楽しむ会で40種以上の山の幸が味える。果実酒も人気。5月中旬～下旬。問山菜を楽しむ会☎02559(7)2603

●**山と湖のまつり**（新潟県湯之谷村）
川魚のつかみ取り等の後地酒と川魚の塩焼きで一日を過ごす「温泉まつり」（6月上旬）、「奥只見ピクニカル尾瀬」（6月中旬～10月中旬）も実施。問観光協会☎02579(2)7535

●**あかどまり祭り**（新潟県赤泊村）
山桜、つつじの名所八幡若宮神社の祭礼。御神輿、山車、大獅子等がくり出し披露される。4月18日。問自然休養村管理センター☎0259(87)3121

〔東北地区〕

●**桜まつり**（青森県脇野沢村）
愛宕山公園を中心にカラオケ大会、園児の踊りなどを。5月初旬。問観光協会☎0175(44)2217

●**室根山春まつり**（岩手県室根村）
室根山一帯に咲き誇る山つつじの大群生はすばらしい。4月25日～6月20日まで。問役場総務課☎0191(64)2111

●**田瀬湖あやめ祭り**（岩手県東和町）
約2haの中に20万本の大あやめが咲くあやめの名所。まつり期間中には郷土芸能等のイベントも多彩に。6月下旬～7月。問観光協会☎0198(42)2111

●**平庭高原つつじ祭**（岩手県山形村）
全山を赤く染めるつつじの下で俳句大会、闘牛大会を。6月上旬。問役場企画課☎0194(72)2111

●**花山湖ヘラブナ釣り大会**（宮城県花山村）
桜の開花（4月下旬）に合わせて湖で釣り大会。賞品もどっさり。問漁業共同組合☎0228(56)2068

●**山王史跡公園あやめ祭り**（宮城県一迫町）
9000㎡の公園内にはあやめ、かきつばた、花しょうぶなど120万株が咲く、東北一のあやめ園。6月中旬～7月中旬。問観光協会☎0228(52)2111

●**さくら祭り**（秋田県八森町）
町の広場でさくら開花を祝って町民みんなで花見の宴。4月下旬。問役場産業課☎0185(77)2111

●**黄桜まつり**（秋田県東由利町）
由利牛のバーベキュー、ヤマメ釣り、河原で塩焼きなど、桜を祝って。5月中旬。問役場内・観光協会☎0184(69)2110

●**あやめ祭り**（秋田県平鹿町）
和洋風の庭園を持つ浅舞公園のあやめ園には100種、10万本のあやめがあり、観光客で賑わう。6月下旬～7月上旬。問観光協会☎0182(24)1111

●**真室川梅まつり**（山形県真室川町）
300本に及ぶ梅林の下で茶会、俳句大会、マラソン大会など多彩な行事。4月下旬～5月上旬。問役場内・観光協会☎0233(62)2111

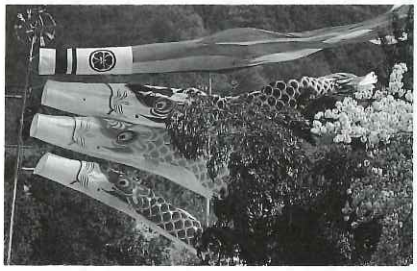
●**楯山公園桜まつり**（山形県立川町）
ゴールデンウィークが桜の見頃。花の下で各種イベントを行う。問観光協会☎0234(56)2211

●**小林山菜まつり**（山形県平田町）
青葉若葉の中、うど、しどけ、わらびなどの山菜を取り、山菜フルコース料理を味う。有料。5月上旬の日曜日。問役場企画課☎0234(52)3111

●**ふるさと村山菜まつり**（山形県大江町）
山菜料理、山菜の即売、郷土芸能上演など多彩。6月第一日曜日。問役場企画課☎0237(62)2111

●**会津駒ケ岳山開き**、檜枝岐歌舞伎（福島県檜枝岐村）
5月第三日曜日は駒ケ岳の山開き。標高2132mからの眺めはすばらしい。7月の雪解けに咲く南京小梅の群生が有名。一方町では5月12日に江戸時代より伝わる古典歌舞伎を上演。問観光協会☎0241(75)2432

5月の空にこいのぼり！



昔から「端午の節句」（5月5日・子供の日）にはこいのぼりを立てて祝う習慣がありますが、この行事を町や地域みんなで行い、何百、何千というこいのぼりを飾って祝う地域があります。また子供の少なくなった過疎の村落では、お年寄りが遠くにいる孫たちの健康と幸せを祈って一年中風車をまわしているところもあります。

●**杖立温泉鯉のぼり祭り**（熊本県小国町）
約2000尾のこいのぼりが空を泳いで壮観。

●**日本童話祭**（大分県玖珠町）
世界一の大きなこいのぼりを飾る他イベント多数。

●**こいのぼり祭り**（群馬県万場町）
川の対岸に約500尾を吊るす。

夏休み!●参加者募集中

●**人間ばん馬競争**(北海道置戸町)
500kgの丸太を5人チームで、障害二ヵ所を含む80mの砂場を引っぱり競う全国でも珍しい力持ち大会。山神祭、オケクラフトの販売会もあり大賑わい。7月第一土・日曜日。㊐役場林務商工課☎0157(52)3311

●**インターナショナル・オホーツクサイクリング**(北海道雄武町)
雄武～斜里間200kmをサイクリングで2日間走る。有名選手の参加も。7月第二土・日曜日。㊐役場企画室☎01588(4)2121

●**大自然交流学校**(青森県脇野沢村)
脇野沢西海岸を中心に、海上遊覧、地引き網、定置網体験、海質生物観察会、海水浴など多彩なプログラム。7月～8月。㊐役場振興課☎0175(44)2111

●**阿武隈川いかだ下り大会**(宮城県丸森町)
阿武隈川ライン舟下り。杉の人束舟場～角田間約20kmコースでイカダの材料は自由。7月第三日曜日。㊐観光協会☎0224(72)2111

●**承水路横断レース大会**(秋田県琴丘町)
日本最大の干拓事業で残された八郎湖承水路で往復800m間を、手こぎイカダで横断、時間を競う大会。毎年7月の最終日曜日開催。㊐商工会☎0185(87)2319

●**最上川激流全国イカダ下り選手権大会**(山形県朝日町)
日本三大激流の一つ最上川で、3人1組になりイカダで下りタイムを競い合う。イカダは役場が用意してくれる。7月下旬。㊐役場企画課☎0237(67)2111

●**渓流釣り大会**(福島県舘岩町)
イワナの里湯ノ岐川、西根川で行われ、大漁賞を競い合う。参加者にはイワナと宿泊割引券を。6月28日、7月5日午前6時開始。㊐観光協会☎0241(78)2546

●**弥平四郎登山「いいでの集い」**(福島県西会津町)
磐越西線野沢駅下車、バス1時間。飯豊連峰登山口で交歓会、キャンプファイヤーを楽しむ。2泊3日山小屋泊。7月下旬。㊐役場企画開発課☎0241(45)2211

●**ハンググライダー大会**(新潟県吉川町)
民神岳にて県内外の選手によるハンググライダー大会を開催。7月下旬。㊐役場産業課内☎0255(48)2311

●**夏休みわんぱく村**(長野県坂北村)
美しい渓流の里、差切峡で小学生を対象に川遊び、水鉄砲づくり、花火大会などを1泊2日で実施。グループでどうぞ。7月20日～8月31日。㊐役場振興課☎0263(66)2211

●**乗鞍岳自然観察教室**(岐阜県丹生川村)
登山、ハイキングを楽しみながら動植物の観察会を行う。7月下旬～8月上旬。㊐役場商工観光課☎05777(8)1111

●**瀬戸内サイクルロード大会**(岡山県牛窓町)
景観のすばらしい前島1周5.5kmをグリーンロードする。7月第一日曜日。㊐岡山県サイクリング協会☎0862(63)2662
また同日は西脇海水浴場でウインドサーフィン大会も開催。参加者はセイルボードを自由に操作できる人。㊐役場産業課☎086934－3431

●**夏のこども村**(岡山県阿波村)
もちつき大会、魚の手づかみ、いも堀り、流しソーメン、ペンダント作り、竹細工など楽しいプログラムがいっぱい。7月1日～9月10日。㊐観光協会☎0868(46)2011

●**四万十川筏下り・川開き**(高知県窪川町)
日本一の清流四万十川を守り育てる運動の一つとして筏で下り自然と人との交流を深める。7月。㊐四万十川上流淡水魚業協同組合☎08802(2)1673

●**「五足の靴」全国短歌大会**(熊本県天草町)
文学遊歩道や町内を観光しながら短歌を詠み、参加者には賞品や町の特産品が贈られる。8月第一土・日曜日。㊐観光協会☎0969(42)1111

●**歌多郎会川下り大会**(大分県清川村)
星空の下で語り合おう「歌多郎会」による川下り大会。スリルとロマンをどうぞ。7月下旬～8月。㊐役場商工会☎097435－2277

〔北海道〕

●**城丘公園桜まつり**(厚沢部町)
古戦場である館城跡の満開の桜の下で野点やジンギスカンなどで一日のんびり憩う会。5月中旬。㊐役場農林商工課☎01396(4)3311

●**花まつりパレード**(栗山町)
8頭の白象にタイ国の民族衣装をまとった子供を乗せてパレード。北国に春を告げるユニークな行事。5月5日。㊐役場商工課☎01237(2)1111

●**シバザクラ祭り**(滝上町)
10万㎡の公園に咲き乱れるシバザクラを背景に、一ヵ月間土、日曜日に多彩な行事が行われる。5月中旬～6月中旬。㊐観光協会☎0158(29)2169

●**穂別つつじ祭り**(穂別町)
つつじの販売、緑化、木工製品の販売、町内物産即売、盆栽展など。5月3日～5日。㊐つつじ祭り実行委員会☎01454(5)2311

●**新得神社山桜まつり**(新得町)
3000本の桜が咲き誇る神社境内には全道各地より約1万人が訪れて、出店や催しで賑わう。5月上旬～中旬。㊐役場企画商工課☎01566(4)5111

●**恵山岬公園どうだんつつじ祭**(椴法華村)
つつじ開花に合わせて公園内では郷土料理、イカのポンポン焼き、ほたて等の魚介類をふるまい、のど自慢大会を開催。6月上旬土日曜日。㊐観光協会☎0138(86)2111

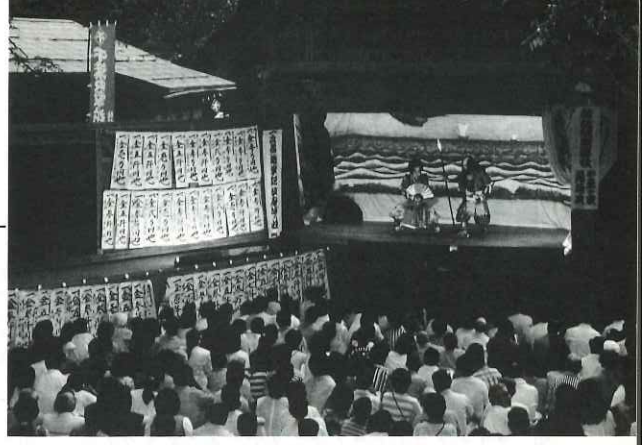
●**夷王山まつり**(上ノ国町)
エゾヤマツツジ咲く夷王山で、全道モトクロス大会、ばん馬大会が催される。6月第三土・日曜日。㊐町商工会☎01395(5)2121

●**えび・いちご祭り**(増毛町)
海の幸エビと山の幸イチゴの即売会を中心にイベントいろいろ。6月下旬。㊐役場商工観光課☎01645(3)1111

●**つつじまつり／島開き**(羽幌町)
「緑の村」でつつじ開花時にゲーム大会、農・海産物即売会を。6月初旬の日曜日。また、天売島、焼尻島港では6月第一土曜日に開島を祝って海産物販売や浜鍋サービス。㊐観光協会☎01646(2)1211

●**藤まつり**(丸瀬布町)
弘政寺境内には50株の藤の花が咲き見物客で賑わう。ミス藤娘人気投票やカラオケ大会。6月中旬。㊐観光協会☎01584(7)2121

●**すずらん祭り**(更別村)
更別フィッシュファーム周辺を会場に、すずらん狩りや各種アトラクションを催す。6月第二日曜日。㊐観光協会☎0155(52)2111



江戸時代の近松の古典を伝承する檜枝岐歌舞伎。

春の喜びをわかち、豊作を祈願！

郷土芸能祭

●**相内虫送り**（青森県市浦村）
田植え後の〝さなえぶり〟に荒馬と太刀振りの踊りで豊作祈願。6月上旬。問役場☎0173(62)2111

●**江刺の鹿踊り**（岩手県江刺市）
江刺市には12の鹿踊り団体があり、そのいずれもが太鼓を打ちながら踊る八鹿踊りに属するもの。百人による踊りは勇壮である。5月3日。当日は「江刺甚句まつり」も開催され、パレードや屋台も出て賑わう。問市教育委員会☎0197(35)6555

●**八葉山天台寺例祭**（岩手県浄法寺町）
東北最古の名刹天台寺の春季例大祭で、白装束の御興渡しや神楽を演じる。5月5日。問観光協会☎0195(38)2217

●**山戸能**（山形県温海町）
古来より河内神社に奉納されてきた県指定無形民俗文化財の神事。山五十川歌舞伎と共に春祭り（5月3日）に公演される。問山五十川古典芸能保存会☎0235(45)2949

●**槍枝岐歌舞伎**（福島県檜枝岐村）
江戸時代から近松の名作が古典のままの姿で伝承され上演され続けてきたもの。素朴でユーモラス。5月12、8月18日。問観光協会☎0241(75)2432

●**大山まつり**（福島県西会津町）
野沢の山の神様として、信仰を集める大山祇神社の大祭で、10万人の参拝者で賑わう。6月中開催。問役場内観光協会☎0241(45)2211

●**牛の角突き**（新潟県山古志村）
古くから春の行事として賑わってきた「闘牛」祭り。県内外より闘志あふれる優良牛が集まり、力を競う。5月～11月。問役場内観光協会☎0258(59)2330

●**獅子舞**（富山県利賀村）
各地区ごとに大獅子（百足獅子）や小獅子が出て舞い踊り、各家々を回って厄を払う。5月3日～5日。問役場企画室☎0763(68)2111

●**信州大鹿歌舞伎**（長野県大鹿村）
220年以上伝承され、そのままの姿をいまに残している素朴な歌舞伎で、全国からファンが訪れる。県指定無形文化財。5月3日。問役場教育委員会☎0265(39)2001

●**駒ヶ岳神社例祭**（長野県上松町）
木曽駒ヶ岳の山開きを奉納して毎年6月から7月初めに行われる太々神楽だが、5月3日には町内で特別に披露される。県指定無形文化財。問役場内観光協会☎0264(52)2001

●**浅間祭**（三重県南島町）
竹の先に日の丸の扇やカラフルな布をつけて浅間神社に奉納する伝統的な行事。6月下旬。問役場企画室☎0596(7)1111

●**若桜神社御幸祭**（鳥取県若桜町）
御興、榊、武者行列などが繰り出し終日賑わう。深夜、松明の中を帰還する御興の行列で祭りは最高潮を迎える。5月3日。問役場内観光協会☎0858(82)1111

●**湯村温泉まつり**（兵庫県温泉町）
開祖慈覚大師をしのび弘安の頃より行われてきた〝花湯まつり〟。菖蒲湯と勝運を競う菖蒲綱引が名物。6月7日。問観光協会☎0796(2)2000

●**山中一揆義民祭**（岡山県湯原町）
義民の丘で一揆で死んだ人々を供養する目的から、太鼓等を打ち鳴らすなど多彩な行事。5月2、3日。問町役場☎0867(62)2011

●**本郷はやし田**（広島県美土里町）
旧藩時代より伝承される囃子で5月20日～6月末までの間に実演発表会を行う。「本郷はやし」「生田はやし」がある。問役場教育委員会☎0826(5)0311

●**さんばい祭り**（広島県高宮町）
神事、花田植、泥田に素足の早乙女、歌大工、太鼓、飾り牛など総勢50人が演ずる国指定無形民俗芸能。6月下旬。問役場内観光協会☎0826(7)0311

●**生立八幡宮神幸祭**（福岡県犀川（さいかわ）町）
高さ15m、重さ3.5tの山車をはっぴ姿の若者達が動かし練り歩く勇壮な祭り。5月9日～11日。問役場企画室☎0930(4)0001

編集後記

●「でぽら」第2号をおとどけ致します。特集「田舎で暮らしませんか！」で紹介している各町村の宅地分譲は、事業主体が三セクや組合によるものを含めるとかなりの町村が計画中で、田舎に住みたいと考えている人にはまたとないチャンスです。

●「田舎暮らしのここが魅力」では、田舎へ移り住んだ何人かを取材。特別なことではなく、自然体に自分らしく生きる、というのがみんなの共通した意識で、現代人が置き忘れてきてしまった大切なものを見る思い。田舎自体も魅力的だが、田舎暮らしを積極的に選択した人々はさらに魅力的である。（A）

●東京の過疎地、檜原村を訪ねた。ここに住んで8年という藤原さんの「子供たちを村から追い出しているのは、結局大人たちなんです」という言葉が印象的だった。経済優先の暮らしから自給自足を美徳としたかつての農家の暮らしを、大人たちが謙虚に見つめ直す時がきているのではないか（K）

でぽら

No.2（'92春夏）

発行日／平成4年3月15日

発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒100 東京都千代田区永田町1-11-35
全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

編集 協力・印刷／㈱ぎょうせい

■協力／㈶地域活性化センター・
㈶ふるさと情報センター

日本一美しい川"四万十川"。この上流、中流に物件が多い。

●国民休暇県・高知のカントリーライフガイド事業

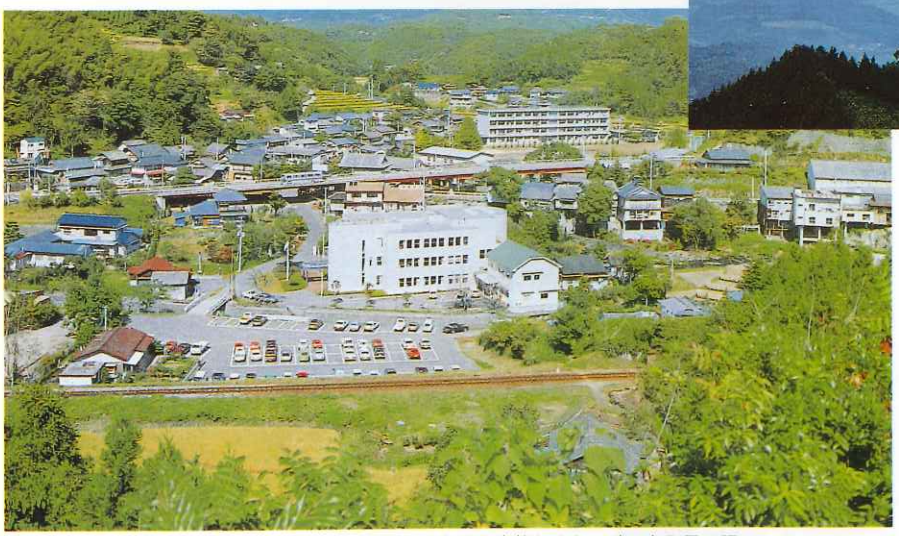
高知県では県の事業として、県内の農山漁村を中心に住む人のいなくなった家や田畑を、田舎暮らしがしたいという都会の人に売却または貸付けている。暖かな気候、豊かな森林と青く澄んだ空や海、開放的な県民性など、田舎暮らしをはじめるための条件もそろっている。

現在までに『こうち田舎案内』パンフレットに紹介された町村は四万十川上流の梼原町、東津野村、十和村、中村市、吉野川の上流の本山町、土佐町など。

漁業の盛んな海岸線を走る土佐くろしお鉄道

梼原町の売出し農家(建物122㎡、敷地430㎡に畑、山林も含む)の例。

神角寺より祖母山系を望む



町の中心部。アニメ「となりのトトロ」に出てくるような素敵なまちです、と町民は語る。

●大分県・朝地町

大分市から車で約1時間、豊肥線も通っていて交通便もよい。町の中心部に比較的近い場所に「やすらぎ住宅団地」23戸を造成中で今年4月頃に募集を行う予定になっている。宅地は1区画平均150坪で、町に永住を希望する人に、月額坪100円で貸出し、20年後には無料で贈与される。この住宅団地は"やすらぎと芸術の里"づくり事業の一環として行われている。

田舎暮らしのここが魅力

長谷村（長野県）原さん・笠井さん一家

原卓男さんの木工工房。空家を活用したもの。

野山で摘んだ薬草や木の実を軒下に干して、咳止めや料理に利用する。

経済性よりも自分の時間を大切にしたいと語る原さんは本も書いている。

自家製の小豆や大豆は美味で貴重なタンパク源。

手打ちそばを作る笠井秀一さん。

家族の本来の心あたたまる生活がある。笠井さんと原さん夫妻。

茹で加減がそばのいのち。自慢の手打ちそばが出来上り。

日本の原風景

晴れ渡った５月の空を泳ぐこいのぼり。若葉青葉が萌え、花々が咲き、野も山も一年中で一番美しく活気に満ちあふれた季節である。最近は子供たちの数が減って、こいのぼりの数も少なくなった山村だが、沢山のこいのぼりを立てて都会に住む孫たちの健康を祈ることを行事にしている地方もある。
緑の風よ伝えて！子等の元気な声を待つふるさとを。

☆本誌に対するご意見、ご感想、ご提言をお寄せください。――住所、氏名、職業、年齢、電話番号を明記のうえ、全国過疎地域活性化連盟「でぽら」係（〒100 東京都千代田区永田町1-11-35全国町村会館内/ＴＥＬ03-3580-3070）までハガキか封書でご送付ください。

でぽら No.2
平成4年3月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟　〒100 東京都千代田区永田町1-11-35 全国町村会館6階 ☎03(3580)3070代

あたしは、宝くじがお好きでございます。

「あたしね、前からね、ずっとね、実はね…」なんて
照れながら、宝くじに対する好意をほのめかす方が
いらっしゃる。かと思うと、「すれ、好きで好きでたまらんのだよ」と
激愛を激白してくださるファンも増えている。
一億人一億色の好感パワーに支えられて、約半世紀。
宝くじは、これからも、ますますいとしくなっていきますよ。

（本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです。）

宝くじ
財団法人 日本宝くじ協会